323
325

木村卯之著

藝術に於ける日本主義

始

特216
147

藝術に於ける日本主義

木村卯之著

愛知縣
齊寺藏

雪舟筆惠可斷臂圖

はしがき

拙い短篇を輯めてのこの一小冊子の發刊は偏に井上右近、松本平治兩氏の厚き思召と御配慮に任せたものである。

こと〴〵しく序文と云ふほどのものはいらぬのであるが、近く岡倉天心の原英文『茶の本』と題する世界的名著と謳はれて居るものゝ和譯を讀んで見て目に留まつた言葉の二三を擧げて感想を簡單に述べて見ようと思ふ。

「道敎がアジア人の生活に對してなした主な貢献は美學の領域であつた」

「茶道一切の理想は、人生の些事の中にでも偉大を考へるといふ禪の考から出たもの」

「願くは古人を憧憬することは一層切に、彼らに模倣することは少からんことを！」

「美しいものゝ眞の理解は只ある中心點に注意を集中することによつてのみ出來る」

「眞の美は只の不完全を心の中に完成する人によつてのみ見出される」

「極東の藝術は均齊といふことは完成を表はすのみならず、重複を表はすものとしてことに避けた」

「偉い利休は、自分だけに面白いと思はれる物のみを愛好する勇氣があつた」(小堀遠州の言)

「不必要な物の微妙な用途を認める時、彼は藝術の國に入る」

「この人生といふ、愚かな苦勞の波の騷がしい海の上の生活を、……我々は心の安定を保たうとしてはよろめき、水平線上に浮ぶ雲に悉く暴風雨の前兆を見る、然しながら、永遠に向つて押し寄せる波浪のうねりの中に、喜びと美しさが存して居る。何故にその心を汲まないのであるか」

九十頁餘の岩波本から、これだけの引用では全く片鱗に過ぎぬが、購ひやすき短篇であるからして讀者がそれを通讀せらるゝことを豫期しておくのである。最後のは天心の人生觀と見ることが出來る。われらの共鳴し得る人生觀である、この人生觀に立つて茶道の靜寂簡素の精神を說きつゝも何かそこに動亂の波をたゞえてゐる表現は、對西洋人的啓蒙の誇張と潤飾はあつても力づよくわれらを動かすものがあると信ずる。「永劫はこれたゞ瞬時、涅槃は常に掌握の中、不朽は永遠の變化に存す、……眞に肝要なるは完成するまでのプロセスであつて完成そのものではない」とも言ふ。こ

の心を興趣豐に說明して居るのである。

信と藝術とは內と外とである。藝術は人生觀の表現であるからして日本藝術は日本的信の表現である。

わが言語藝術に於ける正岡子規、東洋の造形藝術に對する岡倉天心は明治時代に生まれて永く後代を指導すべき綜合的二大天才であると信ずるのである。

日本畫が油繪に壓倒されて居つた時代に墨繪の神韻を說いて「或る點で東洋は西洋に優るといふことを信じ得るが」と西洋人に叫びかけた天心の確信を偲ぶことはこの小冊子の發刊に際して先覺に對する報恩の一端と信ずるのである。

昭和四年三月廿一日月明の夜

木村卯之記

目次

はしがき
口　繪（雪舟筆惠可斷臂圖）
隨感錄……（一頁）
明治天皇御集拜誦……（六）
こゝろみ（長詩）……（一三）
古典研究と詩の心……（一八）
眞宗味の藝術……（二四）
能樂と東洋藝術の精神……（三三）
藝術的表現の形式と內容……（三八）
見當のつかぬ『古』といふこと……（四五）
好古日錄……（五一）
明治大正名作展覽會瞥見……（五九）

通俗的文藝の意義に就いて……（六五）
萬葉集古義讀後感……（七三）
精神技術……（七八）
無心有想錄……（八〇）
穿苔錄……（八六）
偶感漫錄……（九六）

附篇

口　繪（木村卯之筆庭前雪景）
直庵と華山（消息）……（一頁）
藝術のもとゝなるところ（同上）……（一）
藝術は一切に君臨すと云ふこと（歌）……（三）
繪の話……（三）
レンブラントの繪（消息）……（四）

若冲の繪の寫眞（歌）……（五）
大觀の瀟湘八景と文雄の竹林秋粧（消息）……（六）
信實の北野緣起繪卷（同上）……（七）
友へ（歌）……（七）
描くにも（同上）……（八）
帝展一覽……（八）

己上

隨感錄

——原理日本誌の創刊に際して——

組織的研究といふことも、その內容に就いて云へばいろ〳〵に考へられもするが、いま自分の分際としては體驗的告白的表現方法を取るより外にしかたがない。本誌の題名『原理日本』と云ふを見るにつけて岩野泡鳴の編輯發行してゐた『日本主義』と云ふ雜誌のことを思ひ出すのである、僕もそれには殆ど協力的に每號寄稿してゐたので、殆ど同じ題名の本誌に執筆することは恰かも故郷へ歸つて來たやうのなつかしさを感ずるのである。

『日本』はわれらに取つての無窮の名なるが故に『日本』と云ふことを體驗認識する上からの思想研究と批判と藝術的表現とに名くる『原理日本』はまた永久に繰返さるべきである。泡鳴は始めその雜誌を『新日本主義』と題したのであるが、あとで「新」といふのを除いてしまつた。無窮の生そのものゝ綜合直觀には新古といふ時間的區劃を限らしめぬのである。回顧が生命的であるのは前進意志力を史的傳統威力に支へし

めようとする場合である。それは生命の無窮聯關からの必然的要求である。

顧みるものゝ生命は顧みらるゝものゝ生命を選ばしむるのである。即ち顧みらるゝものによつて顧みるものゝ生命は測定さるゝのである。

獨逸國民がカントよりもゲーテを顧みようとしてゐるところに現獨逸國民の國民的意志力はうかゞはるゝのである。

簡單に云へば哲學よりも藝術は無窮生成の生命そのものに隨順する綜合精神の表示であるからして現實的威力ある國民はすべて藝術的國民であると斷じ得るのである。

かしこくもわれらは明治天皇御集を仰ぐ國民である。「仰げども仰げども高さしられず大みうたあらはしたまふ大御心は」「大みうたなり出づる時の大御心をしぬびまつるなりかしこかれども」と云ふ樣の歌にわれらの心のいたるきはみは表現されて居るのである。

現實に隨順することは藝術精神である。

現實に隨順するといふのは人生の開展を不可思議のものと信知するのである。しかしこの言葉はいろ〳〵に考へねばならぬことでその內容は綜合的であるから之を學的

認識に爲さうとすれば、ヴントの精神科學といふ考、一般にヴントの學がその註脚となるのである。

藝術に美しいものはそのまゝ美しいと見る現實的感覺に信順するのである。青年も遂には老年と云ふやうに反省するのではなく青年ならば青年のもつたこゝろそのまゝに信順するのである、それ故に現實精神は藝術精神といはるゝのである。高尙の理論は考へても時々の情感には不絕動かされてゆく、その現實をゆるしてこれに信順するのである。しかしそこには客觀的統御があるのであるからして現實理想的ともいはるゝので、これらの理解は體驗にまかすより仕方がない。

不可說不可稱不可思議といふのは神祕幽遠といふやうのことではなく人生の體驗をいふのである。人生の體驗さるべきをいふのである。しかしながらそれを傳へ共に肯かしむるものとしてこゝにことばを重んずるのである。即ち人生を表現することばがその客觀的認識の目標となるといふのである。

如何に高遠のことを考へても現實の人間生活は內に省みればくるしく、なやましく醜くあさましいものである。しかしながらそのうちに沒入するといふことはそれの綜

合統一となるからしてそれらのすべてを解脱せしむるのである。この人生そのものゝ外に卽ち人生の開展そのものを外から理想づけようとすることは驕慢といはるゝのである。神佛といふのが外的威力でなくなつたといふことは、人生の藝術化である。キリストも最後の審判まで人間生活をうつちやつて置くところはよい。

國際現狀は日本國民の安心を許さぬ。歐洲大戰にこりて人類は永久に戰爭といふやうな愚なことはせぬといふやうの無思慮の夢はいま破られて居る筈である。

國家の理念が如何やうに論ぜられようとも現實日本はうつかりすれば滅ぼされてしまふのである。この現實から根ぶかく根づよく人世觀世界觀を綜合開展せしめねばならぬのである。その綜合的觀察の基くところは卽ち藝術精神である。

國民的戰爭に於ける亢奮の情熱と忘我の緊張とは戰爭讃美哲學的觀念の固定を破れば藝術精神的活動である。

階級鬪爭はわれらの全體生命たる『日本』の爲でないからしてそれはいふ如く鬪爭、小ぜり合ひであつて、それが集團的形式に於いてなされても斷滅個我的執着となるのである。それが小ぜり合であることは國民的運命の前には必然に消失せしめらるべき

ことによつて實證さるゝのである。

われらは世界人類の終極的理想狀態は如何やうのものとも思議せぬのである。この段階に於いてわれらの生の究極の意義をみたすのである。

抽象的理想世界は死滅の世界である。この生を肯定して極樂世界を憧憬するごときは驕慢であり、慾張りである。

「自然のやうを知る」とは親戀の言葉であつた。そこに現實藝術精神、われらにとつての日本精神の原理的表現を味はしめらるゝのである。

生は無窮無極の開展である。止まつて一人の一時の思惟によつて考へつくし得らるべくもないと信ずべきである。

世界の人類がその條件的存在の概括的對立として西洋東洋と分たれて居る、この未來の關係開展は日本人として現實の開展を思ふものゝ胸ををどらすものがあるのである。

この世は何が故にあるか、あるが故にある、それ故に人はいきしめらるゝが故にいきる。これのみであると信ずる、われら人間としてこの生に就いて云ひ得ることは。

この暗示的斷片語を序言として今後の論述をこの說明としよう。（原理日本大正十四年十一月號）

明治天皇御集拜誦

序言

僕は親鸞の言葉にわが心の全體が照し合はされるやうに感じてゐるものである。人の世の人の心は親鸞にあらはされてゐると信ずるものである。卽ち現代のわれら日本國民としての心をそこに確信せしめて御集を拜誦するものである。最後のよりどころは「みだぶちは自然のやうをしらせんれうなり」と云ふにある。「自然のやう」と知らしめていたゞくのは實に御製である。卽ち御製は僕らにとつて「みだぶち」にましますと仰ぐのである。また御集を拜誦するについては「散亂放逸もすてられず」といふ親鸞の言葉に味はしめられるところにあるのである。まことに散亂放逸のまゝである。恐多いことであるが「すてられず」と仰いでかきつけるのである。以上拜誦の心持を告白してこの稿を少しつゞけさして頂かうとおもふ。

御製　をりにふれて

いたづらに時を移してことしあればあはたゞしくもたちさわぐかな

まことにわれら日常の經驗をさながらに示し給ふ大御心のいたらぬ隈もなきを仰ぎまつらしめらるゝのである。われらの犯しやすいこの過誤を責め給ふのではなく、殆ど御述懷のやうに示し給ふのである。この過はその時にして初めて痛切に氣づかしめらるゝのである。人生の經驗法則と云ふべきものである。人生の經驗法則はあらゆる人のそれでなくとも、「こと」の起りし者らにとつては一樣の心持を經驗せしむるのである。卽ち法則となるのである。その如くに日本國民にとつて、國民全體の運命にかゝはることは他の何れの國民にもなきものがあるべきが、また人生の經驗法則である。この法則にめさますことが國民道德のよりどころとなると信ずるのである。それ故にまたこの御製に示し給へる人生の痛切の經驗を味ふことは、あらゆる倫理學說の批判の根柢となると信ずるのである。

御製　國、柱

おごそかにたもたざらめや神代よりうけつぎ來たるうらやすの國

かりそめの事に心をうごかすな家の柱とたてらるゝ身は

神代よりうけつぎ給へるこの國をうらやすの國と統べさせ、またいや榮ゑに榮ゑさせたまはむ御責務を御一身に荷はせ給ふ大御心は、われらの拙き心より推しはかりまつりても、まことにおごそかの極みである。その大御心をわれらの家を治むる心に分ち給ひてかく導き給ふのである。徒らなる事に心のたゑず動きやすいわれらの現實の經驗からひしと頂かるる御製と仰ぎまつるのである。

御製　紅葉

うつろひて散らむとすなる紅葉葉をうつくしとのみ思ひけるかな

四十四年の御製である。無極流轉の人生を痛感せさせ給ひし大御心を仰ぎまつらしめらるゝ。われらの拙き心にも變化の一瞬にめさまさるゝ時、無極流轉悠久の生に沒入せしめらるゝのである。無常敏感は無碍意志力から生るゝ。

實朝の歌

ほの〴〵と虛空にみてるあび地獄行くへもなしと云ふもはかなし

こゝにも無常敏感は力づよく現はれて居るけれども御製の「思ひけるかな」と云ふ

大御言葉は實朝の心を大地の上に支ゑしめ給ふと仰ぎまつらしめらるゝ。

御製　寄夏草述懷

國のため民の爲には夏草のことしげくともつとめざらめや

國家事業を煩はしと爲すたゞ大悲息むことなくして志民を益するに存すとの聖德太子の御心と偲び合はせまつらしめらるゝのである。これをわれらの分際に頂けば家の爲はらからの爲には煩はしと思ふともつとめねばと振ひ立たしめらるゝのである。恐れ多いことであるけれども御製を御述懷御告白の大御言葉と拜誦しまつりてわれらの日常の經驗にそれを分ちたまふと味ひまつるのである。

御製　寄花祝

治まれる世の春風をうけてこそ花ものどかに咲き匂ひけれ

人の見る自然である、人の心にうつる自然である、ことを示し給ふのである。われらの分際にとつても家の中穩ならぬ時にはのどかに咲き匂ふ花の姿も眼には止まらぬことを經驗するのである。

御製　落葉隨風

ふきさそふ風のゆくへをゆくへにて思はぬ方にちるもみぢかな

思はぬ方に絶ねず動く心を經驗するわれらにとつて御製はさながらにそれをみそなはし給ふと頂くのである。

御製　雲

あつまると見れば離るゝ大ぞらの雲にも似たるひと心かな

そちこちに動き消ね行きて跡方もなきわれらの心をあはれみそなはし給ふ大ぞらの如き大御心のうちにわれらの僞り多き心をすべて攝取し淨化し盡し給ふのである。

御製　鳥

大空を心のまゝにとぶ鳥もやどるねぐらは忘れざるらむ

『日本』はわれらの心の遂のやどりである。

心のまゝに外國思想を讀み味つて一時迷はうとも遂にはこゝに還り來るのである。いかなる思想が漂泊して來ようとも國語はそれを宿らしむるのである。

御製　待花

さかばかつ散りなむ花をまちどほに思ふぞ人のこゝろなりける

人情の自然、有情と云はるゝわれら人間のこゝろを極めましていつくしみ給ふ大御心を仰ぎまつらしめらるゝ。大御心を仰ぎまつれば理知的解決をたくらむわれらのこちたきこゝろは解放せしめらるゝ。「一切の有碍にさわりなし」といよいよ仰がしめらるゝ。

御製　梅雨

梅雨にたゝみのうへもしめれるをたむろのうちぞ思ひやらるゝ

「有量の諸相こと〴〵く、光曉かふらぬものはなし」と云ふ親鸞の和讃の一節を思ひあはすのである。大御心には眼前有量の現象は直ちに無量無邊の現象につながり及ぼし給ふのである。

御製　をりにふれて

さま〴〵の野菊の花をしどけなくうゑたる庭のおもしろきかな

人の上には秩序をおごろかに守らんことを敎へみちびきたまふ大御心はかく自然をめでいつくしみ給ふ大御心を示したまふことによつて人の上には秩序を守ることの自然なることを知らしめ給ふのである。咲きみだれたる野菊のしどけなき姿をおもしろ

しと興ぜさせ給ひたる、自然のありさまに傾けつくさせ給ふ大御心にわれらはわれらの身の定めも打忘れしめられて親しみまつるのである。この心はまことにわれらの獨自無比の藝術的尊嚴性をたもつ秩序の本づく情意的永久生命であると信ずるのである。

御製　寄道述懐

よこさまにおもひないりそ世の中にすゝまむ道ははかどらずとも

よこさまにおもひ入ることあるべきたゞ人のこゝろをみそなはします大御心を仰ぎまつらしめらるゝ。すべてよきひと、あしきひと、たふときひと、いやしきひと、無碍光佛の御ちかひにはゐらばす、これらをみちびきたまふ」と親鸞の仰ぎたる史的自然の人生綜攝心をわれらは現しくも大御心に仰ぎまつるのである。時々はよこさまにおもひ入らんとする危き心も經驗せしめらるゝにつけて、それらをかくあはれみみそなはし支へます大御心をいよ〳〵仰ぎまつるのである。われらの志す史的不斷改革思想戰はこの大御心を仰ぎまつりての報恩行たることをいま思ふのである。

御製　朝

世の中のことまだ聞かぬあしたこそ人のこゝろはしづかなりけれ

思安まらぬ世のありさまではあるけれども、その日の營みにまだ出ぬ朝のしばらがせめてこゝろ靜なる時の間である。愛憎の新しく違順して行く晝の世に比ぶれば朝の間はわれらにとつてせめて清淨の莊嚴の世界である。くにたみの上、國の行末についてしばらくも大御心の安んぜさせ給はざるよりしてわれらの世の營みの上をもひとしくみそなはし給ふと仰ぎまつるのである。（同前大正十五年一月號）

こゝろみ　（長詩）

貪欲飽くなき人の姿をさながらに描いたならば、繪にしても文にしても、藝術的表現たらしめたならば、その人は救はれる藝術的表現たらしめようとするものゝ心に救はれる。

醜きものなき世は、藝術の上にすさまじかるべし、これは何と云ふことだ。

五濁惡世にかへりては

利益衆生はきはもなし。

「安樂淨土にいたるひと」とは藝術の心ある人だ。

大藝術家親鸞！

大藝術心をもつた人としていま僕は親鸞をながめる。

田代順一兄はかつて親鸞をワグネルに比較して論じられた。

無明煩惱しげくして

塵數のごとく遍滿す

る世界に彼が仰いだ光！

道光明朗超絶せり、

光曉かふらぬものはなし、

解脫の光輪きはもなし、

こゝに和讃から亂抽する光明の諸相！

道元は小藝術家であつた。

彼は自然詩人！

この時窮臘寒天なり、天大雨雪ならずとも深山高峯の冬夜はおもひやるに人物の窓前に立地すべきに非ず……遂に祖室にと着くといへども入室ゆるされず、顧聘せざるごとし……あくるを待つに夜雪なさけなきがごとし……法をもとめ道を求むる志氣のみかさなる……遲明のよるの消息、はからんとするに肝膽もくだけぬるごとし、たゞ身毛の寒怕せらるゝのみなり、

二祖、初祖達磨に參する時の想像詩である。

雪舟惠可斷臂の圖！

この圖には身毛がそれこそ寒怕した。

見てくれたまへ、まづその岩の描き上げを、これが人わざか？達磨の大慈悲のこもる、見やる眼のおごそかなかゞやきを！

斷臂を捧ぐる惠可の伏し目に充實する信順のこゝろの、涙あふれんとする。

道元もよく描いた、しかし雪舟のこの繪は、更におそろしい繪といふのか何といふのか？

藝術は一切に君臨す。

それは光明、
はかりなき知慧の光明！
光は藝術心であつた。
一切の有碍にさわりなきものは、
攝取不捨の心は、
藝術心であつた。
あゝ、人生と表現！
おもひはそらに、
足は地に、
いのるは、自然のやう、みだぶつ！（一一、二五夜）

ちつと君くつろがう、
袴を脱いでくれたまへ、酒でも呑んでくれたまへ、僕は煙草を信濃の嶽の煙なす呑む。両方だめなら腹一杯そこらにあるものを詰め込んでくれたまへ、思ふ存分に大

膽に、異端者の如く振舞へ！
なつかしきは「人」！
人の世界よ、
朝夕の電車の混雑はいやになる、時として腹が立つ、みんなどこかへなくなつてしまへ！と、どなりたくなる、が
この人が、朝鮮へ、樺太へ、滿洲へ、シベリヤへ、印度へ、南洋へ、濠洲へ、アフリカへ、南米へとちらばつて行くのだ、このことばを、いのちを背負つてちらばつて行く時の有様は、思ふも愉快だ。
こゝに見る、それだけの人が居る、はらはらが居る、野に海に森に、またそらに、
世界の隅々に、見よ！
はらからがちらばつて、ひろがつて、天翔りゆくすがたを、
にぎはしき人の世界！（青人草、大正十五年二月號）

古典研究と詩の心

人は漸く文化の傳統にめざめて來た。色々の內容はあるにしても日本人の日本に歸つて來た。また日本文化の鄕土である支那印度の文化に對しても懷かしみの眼をもつて顧みるやうになつた。氣がついて見れば日本文化と、その母胎である東洋文化とは行き詰まつた西洋文化に新しい芽を吹き出させる育みの風であるにちがひない。落着いてわれらは、久しい間塵埃の中に積み重ねて置いた日本文化東洋文化の文獻を一々取り上げて整理し研究しなければならない。そこにわれらが世界文化に寄與する重大の任務がある。

日本文化はわれらの祖先の勞苦の結晶である。われらの精神生活が史的遺產を繼承しておかねばならぬこと、またそれに基いてのみ創造され行くものであることは疑のないことである。日本文化の探究は、またそれが交通によつて交錯進展した凡べての文化の探究ともなつて、初めて世界文化に寄與すべき創造を爲し得ることを知るものである。

人生の直接經驗はもとより藝術宗教哲學等の知的認識を統御すべきものである、けれどもそれを形成する基礎は精神史的生活である。たとへば悟得の心境は一瞬的體達のものであつても、それ迄には思索の艱難を嘗めなければならないのと同じである。

リアリズムと云はれるものが誤つて淺薄の經驗を直接的のものとして狹少の天地に自得の微笑を洩らすものが多い。直接經驗にも深淺厚薄の段階のあることを知らなければならない。古典研究の勃興につれて心境小說とか云ふものが排されて來たのもこに氣附かれて來たからであらう。

自墮落青年の他愛もない耽溺生活を、修練の足らない言葉で表現したやうなものが飽きられて來るのは當然のことである。まことに「詩を作るより田を作れ」である。この警告は文學愛好青年なるものに對しては今日に於いて尤も必要であると思ふ。これに就いて現今の國文教科書副讀本の編纂の仕方はむしろ文學愛好青年養成を促すごとき缺點がありはしまいかと氣遣はれるのである。

藝術的教育といふやうなことが一時流行したことがあり、それが淺薄の見地からであつたが爲に極端に趨つてその弊害を暴露したが、それらは藝術と云ふことに就いて

沈痛嚴肅の見解を缺いて居たのである。

藝術は最深最奥の人生の綜合的直接經驗と文化史的傳統生命の探究とに依らなければならない。藝術は稀有であることを知らなければならない。かう云ふことを知れば淺薄な日常經驗を無教養の言語で塗抹したものが藝術であると思ふやうな誤から覺醒されるであらう。

映畫劇に雇はれたものが「お蔭で藝術家になりました」と云つて喜んだと云ふ笑話があるが、文學愛好青年の心意氣もまづそれと同程度のもので、これは一面から見れば活字印刷の弊害でもある。

とにかく古典研究の機運は、藝術に對する教養の要求と見ることが出來る。藝術が日本文化の史的精神を基礎としなければならないことに氣がついて來たのである。それは宗教哲學に就いても同じ要求である。しかしこの方面ではむしろ概念的煩瑣訓詁に清新の氣息を與へようとする、體驗的生命を附與しようとするのである。

思惟は直觀の基礎であり、直觀は思惟の統一である。それ故に深刻な博大な內容を有する直觀は鍛錬された思惟を基礎としなければならない。宗教的、藝術的、哲學的

それらはその中の或表現形式を取つても、その何れをも含むやうにならなければならない。それは何れにしても沈着嚴肅の心から生れるものである。

與へられたものとして見れば、文化の傳統、その史的生命は不可思議生成的のものである。われらの心から拒斥しやうもない實在である。佛蘭西文壇の最近の問題として辰野隆氏の紹介さるゝ所によれば（讀賣新聞四月五日）

純粹詩歌の論爭なるものがあつて、アンリ、ブレモンと云ふ人の論說が權威的のものとされて居ると云ふ。その論說を辰野氏は要約して次のやうに示される。

「凡べて詩には理性を超に、言詮を絕した或物が存する。それを神秘と名づけても、秘密の魅力と呼んでもいゝが、とにかく、人の心に訴へる愉樂である。詩歌の本質はこゝにある、この意味に於ける神秘は詩の本領であるばかりでなく、廣く一般の藝術は勿論、宗教も科學もその根柢に詩を有しないものはない」

こゝに「人の心に訴へる愉樂」と云ふのは複雜な內容を有するものである。この愉樂と云ふのは信樂（げう）と云ふ言葉に思ひよせることが出來る。「それ眞實信樂を案ずるに、信樂に一念あり、一念と云ふは、これ信樂開發の時尅の極促をあらはし、廣大難思の

慶心をあらはす」と親鸞は云ふのである。親鸞の宗教は詩的宗教と云ふことが出來よう。

更に「人の心」に訴へる言葉は詩であるが、それは日本人にとつての日本語である。われら日本人の心を愉樂をもつて滿す言葉、信樂せしめる言葉の生命は、ブレモンの云ふやうに神秘である。われらにとつて秘密の魅力である。文化史的實在としてのわれらの心に訴へる言葉の生命に體達しなければ、詩は出來ぬのである。その體達は深く廣くわが文化傳統に探究して來らねば得られないものである。「人の心」といつても日本にあつては、まづ「日本人の心」に訴へ得るものでなければならない。

野口米次郎氏が近く日本文化傳統の探究を連續發表して居られるのに氏の將來の發展が期待されるのである。詩の心のみがこの現實生活をそのまゝに愉樂、信樂の天地に隨順せしめるであらう。傳統的民衆的藝術としての和歌俳句の創作が重大の意義を有することを今更に思ふのである。

辰野氏は更にクロオデルの「フランスの韻文に關する主張と考察」の要旨を「フランスの大詩人は詩人と名のつく群には一人もゐない。却つて散文家に多い。例へばラ

ブレエ、パスカル、シャトオブリアン、バルザック、モオリス、ド、ゲランなどである」と紹介しこれは「實に大膽な、然し一面に強い眞理を含む議論である」と云はれて居る。これには詩と云ふものゝ內容の深い鋭い觀察を示したものとして注目すべき論であると思ふ。

自分も嘗つて吉田松陰の語錄を見て、われらの心に訴ふる誠の詩であると思つたことがある。詩とは生命語であると云ふより外に仕方のないものである。クロオデルの大膽な論斷は恐らくブレモンの主張と表裏をなすものであらう。それは「人の心に訴ふる愉樂」と云ふものをやはり基準としての論であるにちがひない。

「大事に臨み無情なるが如きは多情の極と知るべし」と云ふ吉田松陰の言葉があるがこれは沈痛な體驗語であつて、かう云ふ言葉はまことにわれらの心に一種の愉樂、親鸞の云ふ眞實信樂を與へる語である。かう云ふ言葉となつてあらはれる松陰の體驗內容の複雜なものであることが偲ばれるのである。かう云ふ言葉を詩と云ふことは出來ないであらうか。まことに松陰の如きは詩人の自覺なき大詩人であつたと思ふのである。クロオデルの鋭敏な觀察眼を借りてわが古典に就いて大詩人を詩人以外に求むべ

きであらう。

「個々の生命の中に始まつた思惟を一般的生命の中に導き入れる手段のうち最も卓越せるものは詩作である」(大津氏譯『フイヒテ獨逸國民に告ぐ』)と道破されてゐるが、この「一般的生命」と云ふのはフイヒテに取つては獨逸的生命であつたやうに、われらに取つては日本的生命である。國難の前にフイヒテが國語的生命、獨逸文化史的生命を獨立自覺の中心點として絶叫した心は、われらの古典研究を指導すべき精神として參照すべきである。宗教も科學も、また正確科學の研究すらも詩の心を根柢となすべしと說くブレモンの心が、平生自分の思つてる處と一致するのを見出したのは限なき喜である。(日本教育大正十五年五月號)

眞宗味の藝術

生死の兩頭を切斷して、たゞ生、たゞ死、たゞ樂、たゞ苦、たゞ愛、たゞ憎、たゞ憫み、たゞ怒、たゞ喜、その開展に順ずると云ふ、その「順ずる」と云ふ體驗認識がむづかしい。それは悟か、あらず、迷か、あらず、たゞ順ずると云ふのみである。廣

狹の差別にあらず、深淺の測度にあらず、たゞ順ずると云ふのみである。

それで何ともこの人生に就いては云はれなくなる。不可說、不可稱、不可思議の信樂(ぎう)とそれを云ふ。よくも人に敎へられると思ふ。よくも人に敎へることが出來ると考へられるとおもふ。不敎の敎に達するとき人は初めて人を敎へ得るのであらう。藝術はこゝにある。さう思ふだけで何の藝術も出來ぬ自分をあはれむのみである。

學術は藝術に近しとも考へらる。自然科學にしても、精神科學にしても、現象の開展そのものに順じてのその暫定的判斷たるに敬虔に甘んずる限りに於いては、それは藝術に近い。親鸞の宗敎まで來らねば宗敎は藝術に遠い。しかれども藝術を伴はざる宗敎なしとすれば、こゝに僕從としての藝術は暗に主君の地位を占むると見ればよい。

藝術のみ不朽永遠の生命を示す。宗敎は亡びてそれに伴隨したる藝術は常恒の輝を示す。敎へ得ざる人生を常にこゝに導くもの、それは藝術だけである。導くとも、救ふとも、慰むとも、それらは藝術の生命に汲むわれらの生命の働に名づけられる。その藝術を示す人、心、その眼、その手、その肉體は太陽の光を蒙むるわれらの肉體を

超越せしめて太陽の光をも映奪せしむるものである。

はかなき人の營みと云へようか、政治に、經濟に、軍事に、外交に、それらは必勝の對抗によつて爭はれつゝ幻の如く出沒開展す。それもしかしながらその藝術性諦觀によつてその一時的常恒開展としての輝を得しめられる。政治家も、外交家も、實業家も、軍事家もみな藝術家であれ。

われは惱をしらず、惡をしらずとロダンは叫んだと聞くのである。苦惱の底に痛惡の底にあまる思を、餘剩の思を汲み得るものは藝術家なりと云はう。

樂しみに苦の影を、信に悲しみの匂を見聞する、それをまた裏返す一瞬の綜合感は藝術の心である。樂しきに樂め、喜ばしきときに喜べと命じつゝそこに悲哀の影をたなびかす心にも藝術は宿るのである。一翻轉の窮通無碍心は即ち藝術心なりと云はう。

個人の經驗を狹く弱しとのみ見るものもあるが、それには左袒し難い。時代の惱を一身に思ひよせる個人の體驗力に眞の藝術は生るゝからである。この點から見てマルクスを小藝術家として許すことが出來よう。彼には人生の壓搾力がも一つ不足したと粗漫に評することが出來よう。餘剩價値は彼には怨憎の對象となつたが、盡し得ざる

價値と翻轉せしむればそれは尊貴なる藝術の暗示性となる。思索の餘剩價値は藝術の全現範域である。佛陀の無常、苦、空、無我のうち前二者は體驗であり、後二者は價値判斷である。それ故にこの後二者が佛敎の開展を促す餘剩價値である。否定空と肯定空とが哲學的佛敎と藝術的佛敎の別れ目である、とまづ粗雜に云へよう。それから、藝術的佛敎はわが親鸞に於いてその頂點に達したと僕らは見るのである。それには藝術親鸞などはいけませんといふ批難もあるがこの邊は少しよく考へて貰はねば困るのである。

道元の佛敎は俳句表現の心境を養はしめるし、親鸞の佛敎は和歌表現の情緒を統攝せしめるものがある。禪宗と眞宗とがわが二大民衆的言語藝術の背景に横はつてゐることは、誰しも氣づくことである。これは道元の正法眼藏と親鸞の假名聖敎とをよく研究すればたやすく氣づかるゝことであるからである。

否定は消極的分析的であり、肯定は積極的綜合的であるから、否定空佛敎が哲學的であり、肯定空佛敎が藝術的であるのはあやしむに足らぬのである。更に藝術的に於いて禪味はやゝ支那的で、眞宗味は支那には僅に曇鸞あたりにほの見ゆるだけで、こ

れは純日本的である。禪味の漱石文學は、子規から出たが、少し無理になるかも知れぬが、和歌革新に進んだ見識から見れば子規は眞宗に入れることが出來よう。漱石は鬼ッ子であつた。子規全集は俳句界に對するよりも和歌界に復古的刺戟を與へるであらう。乙字歿後俳句は先づ餘喘を保つ有樣である。野口米次郎氏、太田水穗氏の芭蕉禮讃は恐らく禪味よりも眞宗味に屬すべきものであらう。これは何となく漱石時代よりも世の中が複雜な動亂を重ねて來た爲であらう。この邊はよく分析も出來ぬ。

解決的快濶は禪味であり無解決的苦惱は眞宗味である。眞宗味は米の飯であり、禪味は御馳走である。西行芭蕉の方が人麿、實朝よりは人の眼にうつり易い。しかし營養不良的精神生活の昨今、まづ禪味の御馳走に一往滿腹するのも快いことであらう。

資本主義的經濟組織の金城鐵壁は國際生活の現狀に於ては、まづ容易に打破し得らるべく見ねぬ。厚意は感謝するが金は返すといふソビエットロシアに對する英國勞働總同盟の應酬はその雲間の片鱗であらう。この意氣地は英國民の精神に横はる藝術性にまで溯源還元し得られぬことはないとおもふ。ゲーテをして無極の宇宙と評せしめた沙翁の藝術がそれである。他人の精神の臺所は容易に窺知を許さぬものがある。國

民的藝術はいはゞ精神の臺所である。之と比論さるべきわが大近松が眞宗系統の宗教精神を持つてゐたと推せらるゝところから云へば沙翁も眞宗味を有したものと許し得るであらう。これはわれながら隨分の獨斷である。

慈鎭和尙はその愚管鈔において「人間界には怨憎會苦かならずはたす所なり、顯にそのむくいを果さねば冥になるばかりなり」とはまづ情意的歷史哲學として眞宗味的歷史哲學として面白い味を持つてゐる。次で「聖德太子の十七條の中に嫉妬をやめよ嫉妬の思ひはその極なし、かしこく愚なること、又たまきの端なきが如し、我一人得たりとな思ひそと戒めて、寶あるものゝ憂はやす〳〵と通るなり、石を水に投入るゝやうなり、貧しき者の憂は堅くて通ることなし、水に石を打つやう也と仰せられたるこそ三事の詮にては侍る」とやうに太子の語を譯して居る。その憂やす〳〵と通る寶ある國、その憂堅くて通ることなき貧しき國との怨憎會苦は、史的開展によつて紛糾錯雜して容易にその極を見難いであらう。個人間の怨憎會苦はその果を國家に統合せしめて見るより仕方のないことである。

太子の聖鑑は申すも畏し、これをかへりみた慈鎭が當時の社會世相に對する洞察と

愛念とは現在に於ける勞資爭鬪の沈默深刻化に對するわれらの思を反照せしむるものがあるのである。またそれに對する融和の一線を暗示するものがあると思ふのである。貧しきものゝ憂をやすやすとまでは行かずとも、何とかして通す社會政策を國際國民的生活を基準として細密具體的に考究すべき焦眉の急を痛感する。

今日の禪味は丸ビルの商店街頭に蛙の聲を聞かうとする迄の超絶味を要求しよう。華やかな電灯の光と、コンクリートの響き返す足音と、それを自力人力のはかなき營みと一喝し去ることも出來ぬことではない。大空の無極の蒼々と沈默とは心あつて仰ぐものゝ眼にしみ渡る嚴肅さを示すのである。さりながら太陽の子人間、地上の子人間はやはりうづまく生の波に漂沒するのである。無極隨順の心はその客觀化であり、之を入生死菌煩惱林遊戯現神通と昔の人はいつたのである。その表現を眞宗味の藝術と名づけようとおもふのである。その人を現在に求めて、實は何も讀まぬから容易に見つからない。

増島六一郎博士は日本人嘘つきの弊源は漢學を初め語學のごまかしにあると唱破されてある。しかしわざと讀みちがひをした親鸞は釋尊の佛教を徹底せしめたと見られ

るのであるから、談甚だ容易でない。嘘つきも世間虛假とまで徹底すれば嘘の弊源は生そのものにあり、コンマアシャリズムの英國流教育に學ばねばならぬところもあることは英語も正しくは讀めさうもない自分の如きにもよく判るのであるから談甚だ容易でない。しかし實際語學誤學に通ずるでは困るからして博士の警告は傾聽に値するものであらう。

次いでに『日本及日本人』誌上獸醫學博士岸本雄二氏の人壽百歲國民基本衞生論を讀んだところを一言しよう。博士は「扨然らば原始生物が創生した時如何にしてその生が得られたか……結局は「判らない」の一語に歸着する」と云はれてゐる、これは起信論の「忽然念起名爲無明」の歸着點と同一と見られるのである。無明とは「判らない」と和譯の出來ることである。與へられたものをありがたく頂いてそれをなるべく生かさうと云ふのが已むを得ざるわれらの煩惱である。そこに藝術性があると思ふのである。この方面は現代に於いては老子の寡欲と云ふ精神的よりも科學的に願はねばならぬものである。親鸞が九十一二まで生きたことを思つて博士の論の開展を樂しく期待するのである。（同前大正十五年七月號）

能樂と東洋藝術の精神

永田秀雄氏と記憶して居るが、能樂の鑑賞に就いて「クローデル大使が見てゐて欠伸をされたと云ふ事を聞いたが、自分も同感、衣裳の美しいところがよいだけ」と云ふ意味の論を日々新聞で見た。

能樂を見てクローデル大使が欠伸をされたと云ふのは無理もないことで、大使は詩人であつても、幽玄にして花やかと云ふ能樂の極致を鑑賞し得ようもあるまい。素人目に欠伸をさせるやうの處が、少し心得あるものにとつては最も微妙の鑑賞的感激を刺戟させるところである。永田秀雄氏の鑑賞は日本人としては少し早急の嫌がないでもない。まづ世阿彌の能樂論でも考究してから、も一度鑑賞し直したらよいと思ふ。

大體に東洋の藝術は幽遠微妙を極致とするので、それに「花やか」と云ふ全體的姿態を織り込ませたものが能樂で、衣裳の美しいのもそこに脈絡をつけて見なければたゞ感覺的のものになつてしまう。繪畫でも鐵齋のものを神品と見る程の鑑賞眼がなければ能樂の藝術美に參究することはむづかしい。

これは畢竟思想上の問題である。東洋思想を攝取渾融せしめた日本思想の體得味識が能樂鑑賞には基礎的修養である。

能樂の舞踊は、東洋繪畫の描線と同じく分析的抽象的のものである。それで定型的となり外面には靜寂の趣を示すが、內面の緊張は强靱のものがあるのである。觀世太夫の井筒の能を柳生但馬守が見てゐて打ち込む間隙を一ヶ處見屆けた、それは太夫が井筒の作物の中を見たときに虫がゐるなと思つた一瞬であつたとかいふ逸話を聞いたことがある。

日蓮は泣かねども涙ひまなしとか云ふ言葉もある。さうも云はなかつた親鸞は愚痴をこぼしてゐるやうで、人生の永劫の姿を見たのである。手を僅に顏の方へ擧げただけで深刻の悲哀をあらはさうと云ふ能樂の技巧は、感情の抑制に悲痛の道德美を感じようとするわれらの道德觀の藝術的表現であるといつてもよからう。

マチスの繪などは東洋的靜寂の趣を味はせる。殆ど大雅堂、竹田あたりの南畫を見るのと同じやうな感じである。それで非常に人體などに就いても解剖的のものであると云ふ。また當人に云はせれば別に東洋藝術の精神をねらつたものでもないと云ふこ

とである。しかしそれ故に本當に東洋藝術の精神に觸れたものがあるのであらう。生命は非一非異である。

西洋の方の藝術には、この靜寂といふ處に極致を求めるものが少ないやうに見うける。それは人生觀からして違ふのであるからやむを得ない。西洋の方が或はこの人生について現實的眞劍味があると云はれるかしれぬが、われらのおもふ高一層の境地に缺けてゐるやうに思ふ。これも唯漠然と云つたのでは何もいはぬと同じことになるが。

賀川豐彥氏の讀賣新聞紙上宗教欄の暗中隻語は中々の達筆才文である。「惠に輝き愛に香る主のみ足跡の麗しさよ、そのもの靜かな曲節に、私の心が引き締められる」と云ふやうの調子のものである。

かういふ調子は舞踊で云へば何とかダンスと云ふ類としかわれらには見られぬのである。「もの靜」が甚賑やかに感じられる。われらからしてはかう安々と「惠に輝き愛に香れ」ないので、またそれがわれらの人生であると信じてゐる。

現實に理想を、理想に現實を融合せしめようとすると、賀川氏のやうには惠愛に踊つては考へられぬのである。氏の經營協力してゐる農民學校の如きも、たゞ理想ひた

むきに走れば、所謂「惠に輝き愛に香つた」つもりでこれらの事が得意にやれるのである。われら愚惡の人間の中に獨神のやうな心持でゐられることを安んじ得らるゝならば、まことにその人に取つては幸である。富裕者がつい貧窮者の生活の苦痛は考へて見ないと同じやうに。

しかし氏は大聲叱呼して無產階級の味方と云ふ。慥かにさうであらうし、また結構のことである。しかしその人々に日本國民であることを、日本國民としては日本の國法に從ふべきであることをよく呑込ませて貰ひたい。これについては河村幹雄博士の「キリストと祖國愛」なる一文は必ず味讀するがよいとおもふ。

「惠に輝き愛に香る」それは一朝のあだ花のそれになる事も痛感しなくてはならぬ、彼にとつても自分にとつても。人間の慈悲始終なしといふ親鸞の痛切の告白をよく味ふ可きである。かういふ人生の人性に徹した言葉こそ、全くの「もの靜」である。そこには底ひなき人生の動亂が心胸に滿ち湛えられて來るのである。

釋尊の斷煩惱得涅槃は人をして一重の靜寂を味はせるが、不斷煩惱得涅槃に到つて高一層の靜寂に達するのである。道元と親鸞とはその階段を示すものがあるのである。

賀川氏の惠愛をそれらに比するは不倫であるけれども、それらに比すれば氏の思想の如きは、まだ〳〵淺薄の理想主義、親鸞の言葉を借りて云へば「うかれたまひたる人」である。日本國民生活の將來を落着いて考へれば、たゞ無產者の解放など陽氣に騷げるものではない。もつと〳〵「物靜に」人生に就いて思慮しなければならない。

○

常盤大定博士は中央佛敎八月號誌上「黃檗と臨濟」とに於いて「禪の體驗者が靜の中に動ありと看破して、座禪で居る所はいかにも靜かに見ゐるが、寸分なしに自己を見つめることに於いてこんな忙しいことがないと云つて居る」と紹介されて居る。靜的文化と云はるゝ日本文化の內面的緊張は、動的文化と云はるゝ西洋文化に君臨するものであらねばならぬ。綜合藝術たる能樂の鑑賞の如きはこの消息に通じ來らねば殆ど不可能といつてもよい。

「乾坤の變は風雅のたねなり。靜なるものは不變の姿なり、動けるものは變なり、時として止めざれば止らず、止めると云ふは見とめ聞とむるなり、飛花落葉の散みだるるも、その中にして見とめ聞とめざればをさまることなし、又句作りに物の見ゐたる

光り未だ心に消ゐざる中に云ひ止むべし……句作に成ると爲るとあり、內を常に勉めて物に應ずれば、其心の色句と成る。內を常につとめざれば、成らざる故に私意にかけて爲るなり」と芭蕉は句作の心境を說いて居る。こゝに「內につとむる」と云ふことは內面的緊張である。この內面的緊張に「光」は對象に感得さるゝのである。最高度の精神的活動の凝集する靜寂の一瞬は卽ち統合渾融の一瞬である。この一瞬に乘ずるのがわが藝術的表現の極致であると味はるゝのである。

感覺的華麗の蕪村の俳句は似而非なる靜寂の涸渴を救ひはしたが、芭蕉の句境はやはりそれらの上に聳立してゐるのである。それは「內を常につとむる」內的活動の涵養緊張の果に現はされたものであるからである。かう云ふ消息に通じ得たならば永田秀雄氏の能樂鑑賞法も一變するであらう。

○

「久遠劫よりこのかた涅槃を取るべく生死の苦を盡すべし」とは聖德太子法華義疏中に引用されたる經典の言葉であるが、太子が共鳴せられての言葉であるからたゞちに太子の御言葉と拜誦することが出來る。これは不住涅槃ともいはれて、われらの人生

に對する疑惑と困亂とを支へしむる威力のある言葉である。人生の困苦を無限に堪へ行かしむることになつて平行的にその苦を和げる心を惠ましむるのである。

更に進んで「佛智は境の生滅に隨はざるが故に本より興廢なし、ゆへに寂常と名づく」といふところまでの鍛練陶冶が要望せらるゝのである、いまはたゞ「境の生滅に隨はず」と云ふことを日本國民生活と云ふ全體をつねに内に憶ふことゝして、そこに寂常と云はるゝ心を味ひたい。佛智とは綜合智であるからして、現代生活の種々の方面よりする分析的研究を統御綜合するものに名づけるべきものである。賀川氏の「物靜か」がこゝまで參究さるゝことを期待したい。（同前大正十五年九月號）

藝術的表現の形式と内容

學苑九月號に野々村戒三氏の「斯くの如く我が觀たる能樂」といふ一論、本誌で前號に所觀を述べた關係もあり注意して讀んで、その精細の論旨に深く啓發さるゝ處があり、またその要點が略拙論と一致するのを見て愉快に感じた。拙論を補足さして頂くつもりで自分の觀て要點と思ふ處を紹介しようと思ふ。

氏は先づ世阿彌の『能作書』『曲附書』を引用して說明され「能書が音曲と舞踊とを主とする形式的舞臺藝術である」ことを明かにし「隨つてレーゼドラマを批評し研究するやうな態度を以て、曲の内容なり、文章なり、或は其處に表現せられて居る思想なりを主として品隲批評することは全然誤つた態度」と斷ぜられて居る。

それについて謠曲の文章が「錦のボロの寄せ集め」といふ坪内博士の「的確な評」のみで片づけてしまふのを「皮相の見」と難じ、謠曲の文章は要するに「人口に膾炙して居る美辭麗句を、その語調に從つて、目障りよく組合せたもの」で、名文よりも「名調子たらしめる」ことが目的、たとへ「一句一章、皆意味が離れ〳〵で、情調の統一が少しもない」やうでも「それを諷つて見ると、少しの不自然もなく、又その能を觀て居ると何等の不思議も感せない、然もその間に松風村雨らしい感じが、夢のやうに幽婉な響を觀る人聽く人に傳へる」と「松風」を例に擧げてその目的が達せられて居ることを證明され、これが「謠曲の謠曲たり、能樂の能樂たる特色」であり、また「同時に、能樂が、社會的所生の民衆藝術であつた證據ともなる」と斷ぜられて居る、謠曲を諷ひ、能樂を觀得る人から見て異論なかるべき處である。

それから進んで謠曲の取材が室町時代には一般に知れ渡つて居た人物、傳說、緣起の類であることを精細に例を擧げてその民衆的色彩を明にされ「またその思想上から觀察の貧弱である」と云ふ批難に對しては「それは單純であつて、ある概念を寓するに了つて居るからである」が、さうであるから「價値の少いものであるとするのは間違」と駁され、そのうちの佛敎思想を指示し、神明を扱つたそのものについては「去る四月の末、明治聖德記念學會に於けるグンデルト敎授の講演」を紹介され「そこには敎理もなければ、宗旨もなければ何等の理論もない云はゞイラショナルな情緒の醇化そのもの」と說明され、結論として「能樂は、何處までも舞歌を本義とした樂劇であつて思想を第一目的として作られたものではない只それは日本人固有の斷片的感情が結合して一つの大きな感情となつたものであり、又室町時代の社會が生み出した民衆樂劇であるといふ點に於いて、思想內容の方面に於いても文章の方面に於いても、大に顧慮しなければならぬと考へる」と云はれて居る。

尙ルビエンスキー氏が日本音樂について「日本固有の音樂の持つ價値は非常にすぐれたもの、それに西洋音樂中でも野卑低級のものを騷ぎ立てる日本人の心が判らぬ、

何故日本音樂の持つ傳統的な優雅な精美の價値を知らうとしないか、これは演奏者が何等の解釋なしに昔の人の作つたものを機械的形式的に演奏してゐるのが新しき日本人に輕蔑される原因か」と云ふ推測に對して同感され、しかし「倘し今の若い新しがり屋が、能樂を以て唯先人の定めた型通りを何等の解釋なしに繰返して居るものだとして漫然と輕蔑するならば、それは大きな間違だ」と指摘される。これは拙論に於いても聊か論及した點であつた。

最後に「能樂は生活意識を離れた官能の複雜化によつて出來上つたものであるから藝術の墮落だ」と說く論者に對しては「生活をば經濟價値のみで統一した生活と觀る」ことが「千古の鐵案でない」以上「一個の意見として聞くに止めるまで」のもの、要するに「能もろくに見ず世阿彌の遺著すら一讀もしない人たちの能樂論」は机上の空論と云はれて居る。自分としては至極同感の議論である。不滿足ながらこれで野々村氏の能樂論の紹介は終つたことにする。

○

讀賣新聞紙上での土田杏村氏、北原白秋氏の、和歌革新論についての應酬は注目さ

れたのであるが、その餘論とも見るべき土田氏の「大隈言道のリアリズム」なる長論文が出て居る。兩氏の議論のそれ〴〵の立場は、和歌の創作に多少の經驗を有する自分として理解は出來るが、兩氏の說の何れにも全然同感し得ぬ主張をわれらの同志と共に有つて居るが、いまそれを論ずる場合でもない。たゞ土田氏の本論のうちの主要なる氏の主張と見るべき言葉に就いて思ふまゝを述べて見よう。

土田氏は言道の主張の上に補つて置きたいと云つて第一に「現實生活を本位とした言道の主張を一歩進めて、無產者藝術の新らしい理念を提起すること」第二に「內容に卽して形式も出來るとする言道の論を一層徹底せしめて、短歌の三十一音の詩形を打破し自由詩形を取ること」として居る。

これに就いてわれらは第一に現實生活とは國際國民史的生活と信ずるから、現實生活を表現すべき藝術の理念を「日本人」と主張する。卽ち無產者と云ふごとき階級的局分觀念を解脫せしむべき歡喜をめぐむべきものを藝術的表現とする「日本人にとつての日本」を悠久不斷の史的精神生活とするからして、そこには「新らしい」と云ふ如き時の分析的區劃を拒否せしむるのである。たゞ生命といふ丈で足りるとする。この生命のみが藝術の最高究極的生命感に照らされて感せしむる生命は內外に通徹したそれを渾融するのである。いまこれを詳しく分析說明する餘裕もない。

第二に、言道の云ふ「のびちゞみ」は三十一音の詩形を基準として云つて居るので意味を爲す。實際急迫した情緖を十分に客觀化するだけの餘裕のない時には言葉の直接性を失はせまいとして、三十一音の定型律を無視するのではないが、それにあはすことが出來ぬまゝに短くもまた長くもなる、そのまゝにしておくことは、殊に連作歌の性質からしては許さるべきものとして自分らも實行して居る。それはしかし飽くまでも三十一音の定型律を中心とするのである。

新俳句と云ふものは土田氏の象徵詩とかいふものか知らんが、俳句と云ふ名に拘はつて居るがおかしいとおもふ、自由短詩とでも改名するがよいとおもふ。それと同じく土田氏が三十一音詩形を打破し自由詩形を取ると云ふならば何も短歌に關係せしめて云ふ必要はないとおもふ。

十七音の俳句詩形、三十一音の短歌詩形は能樂の型と同じく、打破すべきではなく形式に卽する內容を思ふ可きである。卽ちこの形式はわれら日本人の自然と人生とに

對する情緒感動を藝術的に表現するにふさはしく、卽ち內容に卽して出來た形式であることを思ふべきである、形式が定まつて居ては自由でないと見るやうに淺薄に思はれては土田氏も迷惑されるであらうと思ふ。

實は打破すべきは形式ではなく內容である。芭蕉の俳句革新も內容であつた。言道のは理知主義的でそこに土田氏の感銘をひいたと推察されるのであるが、ともかくそれも內容の革新であつた。また形式が守らるゝやうに情緒感動が客觀化されたる處に眞實の緊密直接のしかも自由無碍の生命律動が感ぜらるゝのである。「自由人」など稱するものらが、われらから觀て甚しく人生を局分して拘束されて居るのである。

とにかく形式打破など云ふのは內容に於いて自由になり得ざる證據ともなるのである。三十一音定型律は嚴として守るべしと云ふ白秋氏の格調論に、贊意を表する。

がよく記憶はせぬが白秋氏の論が孤立短歌に傾くによつて生ずる鍛錬修行論は實人生の直接表現として連作の方法を重んずるわれらの立場からは贊成しかねるのであり

われらの安んずる領域があると云つておかう。

現實の蔭には常に現實のみがあると土田氏は云はるゝが、それでは「理念」と云ふ

のが、おかしなことにならう。しかし土田氏にとつては現實に卽した生活の理念は無產者の世界と云ふのであらうか。

くりかへして云ふ、われらの理念はわれらの史的精神生活から養はれた「無窮日本、また日本人」である。それがわれらにとつて綜合的究極現實的であると。（同前大正十五年十一月號）

見當のつかぬ「古」と云ふこと！

東洋古典の研究と共に日本古典の研究が盛んになつて來た。われらの心はその古鄕を慕ひ初めたのである。「古」といふことをふるくさいと云ふ意味の外には考へなかつたのを生命の根ざすところといふ意味に考へ直したのである。土地にして世界には最早や新しい處とてはなくなつて仕舞つた。

卽ち横にはどうしても眼をさますやうな處はなくなつてしまつた。いかに新しがつても地球上の人間は他の球體に引移るわけにはゆかないのである。昔から佛敎の方では三千大世界と云つて太陽系以外の世界をも考へて仕舞つてゐたから、新しいなどいつて駈け廻る心はなかつたのである。そこで考へにおちつきがあるのである。寂靜の

心といふのはいはゞ宇宙の隅々まで見透したところに生れる。

東西古今人情にかはりはないといふ。その人情を見透せば新しいとか何とかいふのはわけの分らぬことにならう。その人情を見透す心がいつまでも新しいと云へるだけである。それを生命とも云ふであらう。そこで古名畫など云ふときはいつ見ても水々しい生々したところを見る人に感じさせるものを云ふのである。文章でも何でもさうである。いま描かれたやうに水々しく感じさせる、それが生命といはれるのであるがさういふ感じをずつと昔に描かれたものに感じさせるならばそれを古名畫といふのである。俗に「生きてゐる」といふ詐が出るものは古名畫も新名畫も一つである。それだからとくに「古」と云ひ「新」と云ふのはたゞ出來た時間の隔たりを云ふだけであつて、その生命といはれるものは一つであると云ふことがわかる。こゝが考へて見るべき大切の處である。

また「古」には「品」といふことが感じられる。「品」といふ言葉はわれ〳〵が名畫といはるゝ繪などを見てゐるときの感じを全體的にいつたもので分析して説明する事の一寸出來ぬ語である。われ〳〵の情感を高めるものといつたらよからう。情感を高

めると云ふのは、現實の世界を忘れさせる生命のかたち、と云つたらよからう。大分むづかしくなる。現實の世界はきれ〳〵のもの、煩はしいもの、むさいものであるがそれを忘れさすと云ふのは新しい古いもない大きい生命にわれらの心をとけ込ますことだと云つたらよからう。その大きい生命といふのは無限の時間を含んで居ながらさうとも思はぬ、とにかくいま生々した感じに滿たされると云つたやうな心持である、これを史的生命とも云ふのである。いよいよむづかしい。

説明するにむづかしいのは、各々に直接的な感じであるからで「いゝ繪だなあ」と感じる、その刹那の感じの如きはもしかやうに説明をしようとせばお互に分つてゐること、その意味ではやさしいことである。

それでかやうな説明は結極いはゞくたびれ儲けの骨折損、御苦勞様といふことになるのだが、かういふやり方が西洋流には多いので、東洋流は説明をせずにお互の感じに訴へてすまさうとする遣方である。禪宗の方で云ふ「默」といふやうな味は西洋には一寸むかないのである。しかしこの東洋流を近頃はあちらでもやつて見たがつて居るのが由來いはゞおしやべりである西洋人には仲々むづかしからう。

こゝで又説明をつゞける切つかけを得たわけであるが、それは東洋流とか西洋流とかいふ區別をつけることである。さきに云つた史的生命にはいはゞ肌合のちがひがある。大きく云つて西洋のキリスト教文明と東洋の佛教文明とはどうしてもどこか肌合が違ふのである。その佛教文明のうちでまた、日本文明は支那印度とはちがふのである。そこをどことなく感じる、感じさせる力があるところを史的生命と云はうとするのである。それで繪にしても、われらの情感にぴつたりと來るものは何といつても、日本畫である。日本人の描いた繪である。音曲でもさうである。それは見なれる聞きなれると云ふことからそれらのあらはす生命に生き馴れるからで、この生き馴れると云ふことが史的生命の生れたもとであり、それが時間と共に積り積つて拔きさしならぬわれらの心の土となり根となり幹となり枝葉となつたのである。おもへば一切不思議である。この不思議はちとむづかしいが直接的不思議と云ふものである。こゝをよく感じると心が不思議に充實される、高められる。そこをまた「古」といはうとするのである。あゝいひ、かう云ひ何が何やら見當のつかぬことになるが、東洋流の共感式でゆくので、またそれしか自分には出來ぬが、それでこんな説明のやり方になる。

上司小劍氏は日本音樂と西洋音樂と比べると幼稚園の生徒と大學生程のちがひであるといふ、これはお互の感じと云へば、それまでのものだが、さうなると何だか西洋人の言葉と日本人の言葉と比べて西洋人の言葉の方が善いと云ふやうなことになりさうである。小劍氏のやうな感じ方はどうも自分らには不思議におもへてならぬのである。尺八とヴアイオリンと比べて論にはならぬといはれさうだが自分等には尺八の音色の方がどれ程親しまれることか。ヴアイオリンがどんなに立派であらうとも尺八捨てられぬと云ふとちと頑冥かもしれぬがこの點では頑冥に安んじようとするものである。尺八で思ひ出すが、ずつと前に吉田清風氏と宮城道雄氏合奏の「秋の調」を蓄音機で聞いて實にいゝと思つた。秋の景色はどこの國も變りなささうだが、この合奏で聞くとたしかに日本の秋景色の調子がぴつたりと感じられる。ヴアイオリンとピアノでやつて呉れては秋の景色は何ともなく浮ばうが日本的とはなり得ないと思ふ。

宮城道雄氏のその琴のひき方、唄の音調はどこかピアノを思ひあはすやうな調子があつた。ばつとしたやうで力のある聲、彈くと云ふよりも叩きつけると云つたやうのひき方を珍らしいと聞いたのであつた。氏は今度新樂器をつくられたといふ。氏の如

きは先にいつた史的生命、日本文明の肌合をしつかりと押へてその上に西洋文明をとけこましてゆく天才であらう。まことに心づよいことである。

こゝでまた思ふことは「古」といふことゝ「新」と云ふことの深い意味である。いはゞ「古」の生長といふことである。「古」の生長が「新」であると云ふことである。つまり植物にして云へば大地と根とを忘れずそこに生ひ繁らせる枝葉の關係にたとへられることである。

われらの心もちといふのは考へて見ねば一向に何ともないもので少し考へて見れば無限の色合をもつものであることに氣附かされる。日本人の心もちといふものがある同じ東洋人と云つても支那人印度人の心もちではなくまして西洋人の心もちではありやうがない。

むろん地球といふせまいものゝ上に住む人間の心であるから世界共通のところがあるのは云ふまでもないこと、それはしかし現實の世界のことでなく抽象の世界の上でのこと、從つて生きたものの上には何と云つても、際立つた色合のちがひがある筈である。さういふ千差萬別の現實界であつてまたそれを一つにつなげる心もちもあり、

何と云つても云ひつくせないもの結局は不可說不可稱不可思議の人生と云ふのに感じ合ふより仕方がない。（共敬昭和二年一月號）

好古日錄

仁齋と素行

仁齋日札に至高害仁、至靜害義とある。仁とはむつかしく云へば現實人生の創造綜合的開展をおもふ心としても宜しからう。突拍子もない一時的改變を思ふものは、こゝに云ふ至高害仁の一種ともならう。また個人的完成を思へば、それが至靜害義の方になる、とにかくこれは味のある言葉である。

仁齋の孔子最上至極宇宙第一の聖人となす、論語最上至極宇宙第一の書となすと云ふ感激は同情さるゝが、これを同じやうに過高の弊を戒めた山鹿素行が「蓋し聖人と云はんは只人倫の至極にして、全く人にかはれる事なし」と解してそれから上古歷代の天皇を聖人と仰いだのと對照して見ると、仁齋は漢學者流であることが分る。論語がどうあらうとも古事記に還り得なかつた仁齋は、日本人として孔子の道を窮め盡し

たとは云へぬ。

「大御國のいにしへごゝろ」

宣長は日本書記との比較に於いて、世の人の書記の方を重んずるは「からぶみごゝろにのみなづみて、大御國のいにしへごゝろを忘れはてたればぞかし」と斷じてゐる。われら日本人は「大御國のいにしへごゝろ」によみがへる時、外國ぶみ心を正しく批判し得るのである。「やまとことば」の生命を感ずる處われらに取つての批判論理卽ち思想價値判斷力が確立するのである。これはわれらにとつての例外なき眞理である。

太安萬侶の序言の解釋のうち撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭以献上者の項に「此記は本彼の淸御原宮にあめのしたしろしめしゝ天皇の、かしこくも大御親ら撰びたまひ定めたまひ、誦みたまひ唱へ賜へる古語にしあれば、世にたぐひもなく、いとも貴き御ふみにぞありける、さるは御世かはりて後、彼の御志紹ぎますみしわざのなからましかばさばかり貴き古語も、阿禮が命ともろともにうせはてなましを、うれしきかも、おむかしきかも、天つ神國つ神のみたまさちはひまして、和銅の大御代にこのみふらびありて、今のうつゝにこの御ふみの傳はり來つることよ、物學びせむ人頂に捧げ持

ちて、天つ神國つ神、又二御代のすめらみこと、(天武、元明) 又稗田の老翁太朝臣の「みたまのふゆをな忘れそね」としるした宣長の感激歡喜の心はいまさらながらに偲ばるゝのである。われらは、祖先のこの偉大なる思想的事業を仰いでまたこの感激歡喜の心を分たしめ「大御國のいにしへごゝろ」によみがへらねばならぬ。

種々の精神科學研究がこれに就いていかになされようともこの感激歡喜に達せぬならばいたづらごとである。この感激歡喜が外國人に「物げなく淺々」と見ようともわれらにとつては最勝深妙不可思議の生命感である。古事記を有する國民といふプライドはわれらの國家的實現意志と共に悠久のものであらねばならぬ。いついかなる世にならうともこのいにしへのやまと言葉によみがへる「大御國のいにしへごゝろ」は「今のうつゝ」であるべきである。われらの永遠に新しき若きいのちの源泉はこゝに見出さるべきを信ずる。今上天皇の大みことのりに「模擬を戒め創造を勗め」と戒めさせたまふ大みことばを拜誦して宣長のこの感激歡喜の心を痛切に偲ばしめられた。

茶の湯

岡倉覺三の英文著茶の本を瞥見して老子は日本に於いては藝術の方へとり入れられ

たと云つて居るのが一寸眼についた。茶の湯の形式、技巧には老禪の二思想がその背景となつて居ることを說いたものである。誰も知つて居ることであるが、西洋人には興味をもつて迎へられたものであることが察せらるゝ。豐公と千利休との遭逢はそれだけで藝術的情趣を感せしむるものがある。桃山藝術の豐麗絢爛と茶道の淸閑素朴と邪道である。出來合の道具と料理と座敷とで一花一草の床の間のあしらひ、澁茶でやれぬやうのものではなかつた筈だ。文化生活など雜風景なアメリカ式模擬をして居る暇にかう云ふ方面に新工夫を凝らすがいゝ。生活の藝術化も東洋精神と云はれるものを背景にしての傳來の形式方法を顧みるべきである。

クローチエの言葉の一片

岩永淳太郎氏謹輯の明治天皇御製集の大みうたを拜誦して

すなほにてをゝしきものは敷島のやまと詞のすがたなりけり

と示させたまふところを仰ぎまつらしめらるゝ。伊太利のクローチエが「歷史の裡から一の理論を立てようとする」と云ふ考、「人事のまつたき生命を尊重する」と云ふ

精神の如きは共鳴さるゝところであるが、それらすべてこの大みうたの大みこゝろを拜戴するところに自ら感得さるゝのである。（以上日本及日本人、昭和二年三月一日號）

醉人の轉想

涅槃經には衆生は煩惱無明の爲に轉倒心を生ずると言つて、その一例として、「彼の醉人の非轉處に於いて轉想を生ずるが如し」とある。涅槃經は非佛說に屬しようが、これを釋尊の言葉にして居るところが面白い。野良息子の醉拂ひが家に歸つて親爺に勘當を申し渡されて、こんなぐる〳〵廻る家なんぞは眞平御免と言つたと云ふ落語を思出したが、釋尊も强い酒でも呑んで醉拂つた體驗があつたからこんな事も言へたことになると思ふと面白い、此頃の小乘經典の研究によると釋尊の家庭經濟に關する訓話などもあると云ふ。應機說法と云ふこともそこまで碎けた處があるので生きて來ると思ふ。人間としての釋尊が出て來て面白いと思ふ。釋尊はもとよりさう云ふ人であつたにちがひない。妻も持ち子も持ち十分に人間生活の煩惱熾盛の處も濃厚に體驗したからいはゞあつさりした處へも出ぬけることが出來たらう。一面から云へば、高級の酸いも甘いも味ひぬいた人と見てもさう不都合なことはなからう。このあつさりし

た味が禪宗などに發達したらうが、支那のはどうも少し薄汚い處があるやうで、これが日本に渡つて醇厚のあつさり味となつたと云つてよからう。

能樂の舞踊

「能の舞が削減的で、情意の寫實的表出を極度に嫌つて、しかも「花」と云ふやうなところを極致とするのは醇厚のあつさり味の一例とするに足りるだらう。象徴的と云へば片付が早いが、局部的表出をして全體の趣致を前後に無限たらしめようとする技巧は演者に不斷の緊張を要求する。一足一呼吸も忽がせに出來ぬのである。勿論囃方地謠との關係に於いてもそれこそ一絲亂れざる完成的綜合的調和が要求される。傳統的の型は僅少と云はれようが、その內容的表出には無限の個人的創造の餘地を殘して居る。不易と流行との微妙の關係消息がそこにうかがはるゝ。

世阿彌の能樂論

「物まねの品々、筆に盡し難し」と花傳書にある。これは貴賤の人體のみでなく、「花鳥風月の事わざ」に及ぶのである。物まねは風情を寫しとる意味であらう。「似することの人體によりて深淺あるべきなり」とあつて、美しさを損はぬ程に似するを旨とす

ると云ふのである。その美しさはまた「面白さ」ともいふ。現實から抽象して構成する一種の調和感であるが、それは「上つ方の御目に見ゆべからず」と云ふ條件をみたす爲めでもあつた。それだからと云つて能藝術を貴族藝術と云ふやうなことは藝術の創造的普遍性を無視する暴論とならう。鑑賞者の範圍が一部的であるが故に貴族的と云ふならば哲學のごときは貴族學とならう。

世阿彌は「花」と云ふことを言ふ。聲や舞ぶりの觀者に訴へる美的感覺のことだらうと或人は翻譯してくれた。「やう〳〵年闌けゆけば、身の花も、よそ目の花も失するなり」とも言ふ。身の花と云ふは演者の技巧美を主觀的に取つて云ふのであらう。美的感覺は演者と鑑賞者との間に相互的に生動交渉して成立するものであるからである。三十四五歳の時の能を評價して「若しこの時分に天下の許されも足らざるに名望も思ふほどもなくば、如何なる上手なりとも、未だ眞の花を極めぬ爲手と知るべし」と言つて居る。眼や耳に訴ふる藝術的表現の美的感覺に就いては多少鑑賞の範圍に廣狹の別はあるとしてもその範圍內に於いてはその評價が一致することは不可能でないのである。

「古を學び、新を賞する中には、全う風流を邪にすることなかれ」とも世阿彌はいましめてゐる。風流を邪にするのは晉代に於ける清談者流のごときを云ふのであらう。或は粹人通人と云ふものらの唾棄すべき媚態を云ふのであらう。孔子の藝術鑑賞の心境を味つて山鹿素行は士談に風流を說いてゐる。

素行の風流觀

語類士談の卷頭に數十の史譚を擧げて一々に評語を下して居る。その結論として、「唯讀書稽古の事のみにして專ら勞役紛擾して一生を送るいそがはし、甚だ以て誤了す。聖人は天地の如くよく物と推移る、凝滯せば天地こゝに破却すべし」とある。もとより「專ら高尙を好んで風流に心を馳せんことは是又高尙に繫縛せられて、彼の狂狷の風顚漢にして、聖人の取らざるところなり」と指摘して居る。こゝに風流とは專門的關心より或は世俗的煩勞より時として心を放たしむることにならう。「僧にして武儀に長せるはまた風流の一事なり」ともあるからして要は精神活動の對照的展開を指して風流と言つたものであらう。「凝滯せば天地こゝに破却すべし」の語の如きは現代の細密執意の生活に對する清涼的爆彈とも云ふべきである。（同前昭和二年七月十五日發）

明治大正名作展覽會瞥見

展觀に供せられた諸作品は鑑賞的價値の確定されたものが多く所謂一粒選であるから一つ一つ引離して見れば何れも結構のものに相違ないが、かう比較して鑑賞されることになると優秀中の優秀的價値が選ばれて來るのは致方ない。

芳崖と雅邦の代表的作品が何と云つても場中に君臨する。「慈母觀音」と「龍虎」との二作品の前に立つと、繪を慰みに描いて見ようかなど云ふ遊戯心が消されて仕舞ふ。形式が內容を無限に生み出して來る。自然が換置し得ざる位地形態を以て吾等の美的感情に妥當充足して來るやうに、しかもこれは能動的にその創作的意氣から吾等の方へ逼まつて來るのを感ずる。何等の擬議を許さぬ威嚴のうちにすべての意志的關聯から解脫せしめられるのである。これは日本藝術或は廣く云つて東洋藝術が吾等の人生に對して有つ特質的價値と見てよろしいと思ふ。卽ちそこに人生的內容が充たされてあると見るべきものと思ふ。

これを見て鐵齋の蓬萊、群仙の二圖に對すると、是は或は眞似が出來るか知らんと

卒爾に考へられる。形似と描撮とは一見稚拙、粗雜に見られるが、そこに不思議の氣象が感ぜられて來る。現代生活の薫習を全然擺脱したと味はれるこの氣象はそれ故に紙一枚を隔てゝの離卽的關係を人生に暗示せしむるものがある。無過此難の仙書と粗雜に概括して見よう。前二作品と比べると更に一層抽象的構成的形式と內容とを有つものである。

かの表現派とか云はれる繪畫の主觀的構成が、客觀的自然態と全然隔離してしまつて客觀性を失つたのは合理主義論理主義の繫縛拘束のうちに跳躍苦悶するものと見たらどうか。心を自然に托して、その現實的形象を象徵化するまでの敎養が今彼の土の希求しつゝあるものではなからうか。かう考へて吾等の間に鐵齋の藝術的價値が認識せられつゝあるのは世界的文化の一轉歩をその綜合的要素としての日本文化に確信せしめたものと云つてよからう。

春草の「落葉」も愈その價値は高揚されたやうである。これには技巧の上に企及し難いと思はせるものは無いであらう。やはり心境の表現であるところに獨自の威嚴を示してゐるのである。簡單の構圖と、技巧としては比較的に多年の鍛錬を要せざる沒

線描法とは誰にも描けさうであつて、その示す全體の情趣は表現しやすくないと感せしめる處に不朽の生命を宿すのである。天壽を全うせしめたならば更に驚嘆すべきものが出來たであらう。世阿彌の鑑賞眼を借りて云へば、「年の盛りと見る人の、一旦の心の珍しき花なり」と云はれる境界と見てよからう。若木の水々しさである。老柏老松の空に聳ゐる姿態ではない。

玉章はその當時雅邦、玉章と併稱されて、その藝術的風格は劇壇の團菊との對比に思合されたのであるが、全體的にはさう云はれるにしても、「墨堤春曉」をその代表作品として見るとすると、雅邦との鑑賞的價値差の懸隔はあまりに甚しい。まづ竹堂の「雪」の圖あたりと同一水準にあるもの、むしろ、竹堂の圖の方に自然鑑賞とその寫生的忠實の勞苦とが偲ばれる位である。

廣業は名前の緣起が擔がれたと云ふ逸話も聞いたが才人の才筆處である。「瀟湘八景」は支那漫遊の印象からしてその現代化を試みたものであらうが、その印象は感覺的であるに過ぎない。「淸麗」と題する唐美人の圖にモデルの日本型美人がむきだしになつて居るのを見て滑稽に感じたことがある。これに比べると現存作家の關雪の支那

趣味は生命的である。桂月に對して竹田の纖細を論難したあたり意氣盛なるものがあつた。

移つて現存作家に就いて見ると世間の常識的鑑賞通り大觀と栖鳳とが依然として君臨的である。しかし大正の御代に入つては明治の御代とは違つて優秀な作家の輩出がうかゞはれる。そのうちにも觀山、鞆音、玉堂は老先輩として、古徑、靈華、麥仙、關雪、鞆彦がやはり傑出して居る。

大觀の「山路」は專門家の解釋によると沒線畫の塗抹式から描線式に岩繪具を使つて古土佐精神の復興と見るべきもので大觀の轉機を示したものであると云ふが、描線にしても鐵齋の示すものゝやうな意味の描線ではないからやはり沒線畫と見てよいと思ふ。それは兎に角山風に散る秋の木の葉の情趣は崩れる樣に描かれて居る樺色の梢の葉の樣から心憎い程よく浮んで來る。自然の一瞬に移りゆく情趣を是程に把んで示すことは出來にくいであらう。是に比べると觀山の「大原御幸」などは冗漫の感に堪へぬ。觀山のは描線の適確な技巧に惹き付けられる「魔障の圖」が何と云つても代表作と見てよい。「弱法師」は觀山の思想の淺弱なところが見にて來て厭味がある。

玉堂の「二日月」は出世作と云はれるだけに、傳統的描寫法でありながら清新の情趣が溢れて居る。「行く春」は技巧の確かであることは十分認められるが感銘は「二日月」程でない。大きい物で構圖の複雜なものは裝飾畫的に大まかに描かねばうそである。これらを見ると永德などの桃山屏風が對照的に思出されて來る。或は光琳の杜若の屏風の大膽な豐麗さが思合される。丁度同時に表慶館で見た國寶、應擧の襖畫山水の圖の善かつたことを思出した。それは襖四枚に亘る墨畫であるが、その右から二枚は丘をあつさりと描いただけで左二枚に老松の横斜した溪間と流をやゝ密に描いたものである。玉堂には「嵐前」と云ふ山雨來らんとして風樓に滿つと云ふ情趣を寫實的に構圖描法を凝らしたものがあつたが、失敗の作で自然主義的描寫の行詰を思はせるものであつた。表現は單なる自然をではなく理想化のそれであると云ふ單純平易の言說に肯かしめられるのである。その理想化の精神は東洋に深遠の源泉を湛へて居る。それを汲み行かねばならぬことを愈々思ふのである。

栖鳳のは「河口」と「囚はれたる猿と兎」とが出て居た。技巧の冴で見せるのは云ふまでもないが、そこに理想化が出來てゐる。猿と兎の自由なる姿態は瞬間の動作の

特長を把んでゐるので、描かれた瞬間からの無限の變化を暗示するのである。「河口」の如きも極めて自然の一局部でありながら廣いそのあたりの空間を偲ばせる力がある。またその輕快な鮮鋭な筆觸は見るからに快適の情感を生ぜしめるのである。大觀のはその示す形象からその奥へと心を導いて行くものがあるが、栖鳳のは形象そのものゝ中へ心を融かし込んでしまふと云ふ差は感じられる。また芳崖雅邦のを形而上學的と云へば大觀、栖鳳のは科學的と云へよう。そこに時代精神の開展は表示されて居る。

古徑のでは「けしの花」が眼についた。自然に對する感覺の纖細鋭敏なことは殆んど他の追隨を許さないものがある。麥僊のは最初の作の「三人の舞妓」が見たかつたが、「湯女」の圖と「春禽趁晴」の二圖であつた。共に光琳あたりを繼承すべき豊麗の裝飾畵的構圖と傅彩とで感覺を淨化諧調せしめる。靫彦のは掛替で「御產の禱」が出たさうであるが、見たのは「夢殿」である。夢幻境に誘ふだけの力はあるが、それだけ感じは弱い。靈華の「藐姑射の童女」は、描線は平安朝の假名書の筆勢を髣髴せしめるもので、優婉典雅と概括されよう。之に對して唐畵的强靫の描線を示すものに關

雪の「木蘭詩畵稿」がある。少し誇張は感じられるが、それだけに力强いところがある。序であるが、翠雲の「幽窓讀書」圖は代表作と云つてよい。すく〳〵と立つ枯木と雲靄の搖曳する樣の描寫は氣持がよい。鞆音の「武者」と「經政」とは固く傳統を守つての描法であるが「武者」などの描線の確かで力强いところは容易ならぬ鍛錬を偲ばせる。また意氣の充實した點は慥に明治時代の苦鬪進取の精神を表示せしめて居る。面倒な有職故實などを丹念に調べて見ようとする人も少くならうから、かう云ふ格法の畫は今後絶望かもしれぬ。

洋畫彫刻の方は日本畫の鑑賞で疲れてしまつたのとその方面の鑑賞の修養がないのとで素通りにしてしまつた。（日本教育昭和二年九月號）

通俗的文藝の意義に就いて

蘆花氏もなくなつた。蘆花と小說「不如歸」とは聯想の密接したものである。「不如歸」は藝術的價値から云つて通俗的のものとの斷案が文士仲間には多いやうだ。しかし中村武羅夫氏が作者の心境には通俗的な妥協はなかつたと見てゐるのは恐らく妥

當だらう。

誰にも讀まれた本と云ふ意味に於いては慥に通俗的であつた。しかしこゝに通俗的と云ふ意味に就いて考察する必要があらう。「不如歸」の筋は極めて簡單であり、その主人公の女氣質は純日本的である。日本の婦人としての素直さと淑やかさを具へた一女性である。それに與へられた悲劇的運命もさして物珍らしいものでもない。それだけに日本婦人として普通の道徳的意識に生活してゐるものゝ心を動かすに足るものがあつたのである。

國民的歴史的に生成しつゝある道徳的意識に觸れるものならば何人をも理解せしめ感動せしめ得るのである。高級の意義に於いての通俗的も、この道徳的意識、更にそれを擴めて云へば文化的意識に根ざすものでなくてはならぬのである。

所謂大衆文學なるものに歴史的事件を取扱つたものが多く廣く通俗によまるゝのはこの國民文化的、道徳的意識の一端に觸れしめたものがあるからである。

藝術もその究極に於いては道徳を離れ得べきでないことは説明を要するものとしても、藝術は「人生の表現である」と云ふ點からして、即ち國民文化史的生成の埒外に

出づることが出來ないからして、到底否むことの出來ぬことである。人生の事實は、究竟して道徳的意識に關與せざる何物もないのである。

自然主義藝術なるものはこの道徳的意識に新しい刺戟を與へようとする所に史的意義があるのである。現實暴露だけで、ことの濟む人生ではない。その暴露された現實は、必ず統一を要求するのである。これを一身に體驗するものがまことの藝術家である。

本居宣長の漢意、からぶみごゝろ破斥は一種の自然主義的運動であつたと云へる。「詩にみづからの戀の詩なきはかの國人の癖にて、唯だうはべをかざりて、ををしく見せて、誠の心の、めめしさをば云ひ出でず、包みかくしたる物にこそ有けれ。皇國の歌の、戀の多きぞ、まことに性情をのぶる道には有ける」と云ふ斷案は卓見であつたのである。

その熱烈な戀愛の至情が貞操と云ふ道徳的意識に統一さるゝところに悲壯美が成就さるゝのである。無制約の放埒に美的情操の感知されぬのは淵源の深遠な我が國民文化的道徳意義に背馳するからである。蘆花の「不如歸」は慥にこの機微の一端に觸れ

得たものがあるからして通俗的たり得たのである。

近松の世話淨瑠璃に於ける女性が悲壯の道德美を感知せしむるものがあるのは義理と人情との動機的葛藤にあることはよく人の知る通りである。それ故に高級の意義に於ける通俗藝術として所謂大人の鑑賞にも堪へ得るのである。

藝術的を僭稱する小說戲曲が文學愛好青年もしくは文壇人仲間のみの鑑賞の對象となつて、大人に讀ませる文藝を希求するに到らしめたのは畢竟は、國民に普通なる道德的意識とは沒交涉のものであるからである。

要するに人生の痛感は道德的意識を潑溂たらしめるのである。かうした道德的意識と云ふも宣長の指摘した支那流の理知主義合理主義的の、道德と言へばしかつめらしくすることゝ思ふやうなものを指すのではない。簡單に云へば國民としての獨立生存を全うする意志に歸入することを云ふのである。無產階級なる意識は人生痛感の鍛錬を經て來ればこゝに歸結せしめらるゝことを信ずるのである。下尅上は沈滯せる國民的道德意識を淸新ならしむる前驅兆候である。それは無產階級ではなく有爲階級であらねばならぬのである。有爲にして志を得ぬものゝ進路が塞がつて來てそれを打破し

ようとする人生に已むを得ざる情意的活動がしばらく外國思想に刺戟されて居る現狀と見たいのである。

正宗白鳥氏も『今日「プルジョア文學はいけない。プロレタリアの臭ひがなくちやならん」と、當年の自然主義作家が新代の作家に非難されるのも、昔を思ひ出すと、文學史上の一現象として面白い。かうも云つたり、あゝも云つたりしなければ、人間の世は送れないのである、』と云つて居るが、體驗的であるから味があるのである。氏も「かうも云つたり」の事をして來て、これだけの客觀的觀照が出來、またそこに人生觀上に獨自の確信を得て、「あゝも云つたり」者の非難にびくともしないで居られるのである。

相馬御風氏も、田舍の人には芥川氏の「生きてゐるために生きてゐる。我々人間の哀れさ」と云ふ言葉に就いて「それをあはれとおもひ、それをみじめと感じ何とかしてそれを救つてやらうと騷ぎ廻る人々の生活」は「むしろ救はれなければならない」と考へる樣になつた。「僕にはもう田舍の生活に根を下ろして居る人々を救つてやらうなどゝいふやうな、大それた思ひ揚がつた考は到底持ち得なくなつた」と告白してゐ

る。田舍にゐて聖者氣分で指導しようの誤謬を悟つたのは段々に人生を痛感した結果であらう。しかしそれ故同氏は立つて農民赤化の考違を指摘してやるがよい。國民としての生存以外にわれらの生きやうはないことを、お互に救ふ救はれるの關係にない人生の痛感に立つて叫ぶ可きである。「彼等自身の生活のよきものを讃美し、賞揚し、隨喜しそれによつて彼らの生活に一層強い自信を得させる」では少し心細い。マルキシストが農民生活の悲慘狀態を强調して居る今日單に「よきもの」など云つてもその手は食はぬと云ふに違ひないのである。

「還元錄」で田舍に引つ込み良寛を見つけ出して、大分聖者氣分に落ちつかうとして、こゝまで動搖し出したのは氏の將來に多少の期待を置かしむるものもあるのである。「此頃では何もせず何も考へずにぼんやり過した時間を惜しいと思ふやうなことがなくなつた」も年輩相應の述懷として同感の出來る心持である。こゝらに「活」を入れゝればいまこゝに云ふ國民的道德的意識が忽然念起せしめられないでもないと思ふのである。「何事かしなければ生き甲斐がないといふやうな焦燥感の爲に苦しむことのなくなつた、それだけでもかなり救はれたやうな氣分がする」と云ふ處を土臺にして生くる限り人は何事かせねばならぬのである。聖德太子は「國家事業を頒はしとなす。たゞ大悲息むことなくして、志、人を益するに存す」と云はれて居る。氏の熟誦すべきお言葉である。「よきもの」と氏のさがすものは「國民のため」でなくてはならぬ「無窮國家生活のため」でなくてはならぬのである。農民赤化防止は田舍に居るものの國民的責務として氏の如き有識階級の必ず果さねばならぬ處である。

前號にも一寸指摘したやうに白鳥氏は上杉愼吉氏の「箕踞漫筆」なる隨筆に同感したと云ひ、「禮儀作法一々西洋人を標準にするのは、日本としては不見識ではあるまいか。日本は昔から禮儀の正しい國であつた。食堂に於いても西洋の小笠原流に盲從しなくつてもいゝと思はれる」と云つて日本主義の一端をほのめかしてゐる。兎に角最近蘆花氏の小說を通俗的と斷じその他芥川氏の創作に就いても氏一流の批判を爲し、秋聲氏の靡爛戀愛に就いても時流に卓然たる斷案を下してゐるところは何といつても現時の文壇には偉觀たるを失はぬのである。しかしこゝに通俗的と云ふことに就いては少しく考察するところがあつて述べて見たのである。

われらが人生は獨自絕對の經驗であるべきだからして、そこに氣つけば「西洋を標

準にするのは日本人としては不見識」と云ふわれらに平等なる尊嚴感に到達するのである。横山大觀氏が院展に佛畫の展觀を拒斥して日本の油繪をも離脱せしめたのは藝術的尊嚴からしては極めて自然のことであつて、氏が精進努力して院展の回毎に漸く西洋崇拜者流を驚かしつゝ、殊に今回の院展の瀟湘八景に於いて東洋藝術の妙境を開示せしめ、古今東西に亘つての畫壇の巨人の一人たる價値を確定せしめたことは故あるかなと言はざるを得ぬのである。

序であるが野口米次郎氏の院展評に、大觀氏のを評して抒情詩人の畫としたのはその通りであるが、その他を「繪の具の繪」と一括し去つたのは、墨繪癖好を標準としての判斷に墮した嫌がある。少なくとも田中文雄氏の竹林秋粧の天分は認めなくては鑑賞にならぬと思ふのである。大觀氏の墨には變幻無極の色彩を感せしむるものがあるやうに、文雄氏のには慥に墨を感ずる。色彩を沒せしむる統一的生命感がある。將來大いに期待せしめらるゝ新人である。大觀氏が去年の院展作「龍膽」に微妙の色彩を示したやうに、その微妙なる色彩感があればこそ、大觀氏の瀟湘八景が日支の古大家に對して獨自の地位を占め得たのである。墨の色が色彩であることは云ふ迄もなく、遠

浦歸帆と、漁村返照とに金泥を、洞庭秋月の月に胡粉を塗抹せしは現代人的色彩感覺の已むべからざる要求を示したものである。

政治に、宗教に、藝術に、その根本としての教育に「日本的」は當然要求されねばならぬ。無產政黨の最左翼としての勞農黨が今回の府縣會議員選擧戰に於いて總少數中にも最多數の當選者を出しつゝある一方には武者氏の主幹する「大調和」にさへも亞細亞號が特刊せられつゝある。大動亂のうちに徐々に國民的自覺は明かさを增し、確さを强めゆくであらう。人口增加に困ると云ふ程に大和民族の興隆的機運は高められつゝあるのである。我らは人生の悲痛なる運命を痛感せしめらるゝからして生成無極の開展に隨順せしめらるゝのである。强ひて簡單にいはゞ厭世的樂天觀である。何等の構想もなく筆を把つて紙に向ひつゝ、思ひ淀み、流るゝまゝにかきつけて見たゞけである。（同前昭和二年十一月號）

萬葉集古義讀後感

民族自決と云ふことの思想的根據が考へられて國語の尊重に覺醒して來たと云ふ或

る新歸朝者の談話を新聞紙上に見たのである、近くは鹿持雅澄大人の萬葉集古義の廉價版が公にせられ、井上通泰博士の萬葉集新考の發刊も廣告されて居る。「戰ひ取る」とか云ふやうの生硬の翻譯語を濫發して居るマルキシストの思想的重大の缺陷が指摘されねばならぬのである。神代ながらの國語の生命に覺醒せしむるに極りてわれらの生は絶對最高の價値を確めらるゝのである。人生活動の實際的方面の知識技術を修得せしむる法、經學部に對して文科殊にその國語科が君臨的地位に立つ可き實力を養はねばならぬ、と云はるゝのはこの故である。

この意味に於いて古義總論中の「古言」「古學」と題する二章は特にわれらの注意すべき重大論文であると思ふ。まづ「古言」に於いて古言を尊む理由を述べるに就いて左の如く言つて居る。「又今世にして、まことに古をしのぶといふ人は」稀であるが、「たま〳〵古言を好むといふ人のあるに」就いて見ると「世にめづらかにして人のきゝなれぬ一ふしある言をあながちにもとめ出て、人の耳をおどろかし世にたけ〴〵しきことに思はれんと、かまへたるのみのこと」で古言を好むといふ事が尤であると肯かせるものは見當らぬのである。「すべて世中は時々のありさまにつれて、世に異なら

ぬこそよきを古學などする人は、世間の今のさまをうれたみて、己が家の掟、身の行ひよりはじめて、よろづ古のふるまひにせんとかまふるは、かへりて皇神の御こゝろにそむけることなるをさとれる人少し」尊むべきは外形ではなくして精神である。即ち「余が古言を尊むは、その世に異なるが故に好む類」ではなく「まことに古の人の言語は、言廣く寛にして、心高くみやびたるがゆゑ」である、と云ふのである。即ち内に動く情緒と言葉とを精緻に合致せしむる處を尊むと云ふのである。「言廣く寛」とは内的生命を表現せしむる言葉が緻密であると云ふ意である。その例として「な」と「む」との區別を擧げて居る即ち「後世は言廣くたりたるゆゑに、くさ〴〵の理を云ふに便り宜しく、古は言狹かりしがゆゑに、云はんと心に思ひてもいひ足らはぬこと多しと思ふ」は淺見である。「心高くみやびたる」と云ふのは情意の充實を云ふのである。「打きくにはをさなくはかなげに、いひさしたるやうにきこゆることなれど、よく見れば、まことにあはれに身にしみとほる」のである。情意の充實は簡潔の言葉となつてあらはれて「言外に多くの意を含ま」せることになるのである。反省的分析的でなく意志的綜合的であるところが「心高くみやびたる」と云はるゝのである。生命

は言葉にあらはれる、言葉に生命は味はれるのである。國語的生命は卽ち日本的生命である。不可思議不可稱不可說の全史的生命である。國語尊重の動かす可らざる原理的信念はこゝに示されてあるのである。

次に「古學」に於いて萬葉集は、外國の敎、儒佛が浸潤した「その眞中より出たることなれば、なほかの頃の手ぶりを習はむには外つ國の意をば離れがたらん、」しかるに「なほかの頃までをひとへに古風と唱へ」るのは如何との疑難に答へて余が萬葉集をよく〳〵よみあぢはひて、一には皇神の道義をあきらめ、一には言靈の風雅をしたへと常に云ふはことにこゝろありていふことなれば今くはしくわきまへむ」と言つて居る。こゝにはくはしくは紹介が出來ぬから簡單に言はう。

無論「寧樂朝の頃はひたぶるに人の心もわざも、外つ國さまにしみつきたる」時代ではあるが「なほ神代のみてぶりはもろ〳〵の神事と歌詞には正しく傳はり來」つたのである。それは「たかみくら天つ日嗣のうごくことなく、かはることなく、神代も今も一日のごとく、天地にてりたらはして、しろしめしきぬるが故に、かたじけなくも神事と歌詞には、神代のてぶりのたがふことなく、あやまつことなく遺れることなければ、皇神のいつくしき國、言靈のさきはふ國とは」いふのであると云ふ。これは今日に於いてそのまゝにわれらの信念である、われらの生命である。この生命は歌詞にあらはれて居るからして「その言靈のさきはひによりてぞ、皇神のいつくしき道もうかゞはれ」るのである。「されば皇神のみちをうかゞふには、まづ言靈のさきはひによらずして得あるまじく、言靈のさきはふよしをさとるべきはこの萬葉集こそ又なきもの」たるのであると云ふ。これは國語について國語とわれらの生命との關係に就いて、萬葉集に就いて、千古不磨の論と云はるべきものである。この一節は「古學」一章の肝要と見らるゝのである。これよりの細論としてわが君臣の大義が外敎の如何に拘はらず、「たゞよはぬ心」をもつて萬葉の歌に力づよく表現せられて居つて「敎のためとはなけれども、學び得つべきこと、すくなからずなむありける」と云つて居る。敎育一般に就いてこの敎をこゝに見出すこそ最根本的のことである。

正宗白鳥氏が昔は支那崇拜であつたやうに今は西洋物の方がどうも讀んで面白い、外國崇拜は日本人の運命かなど云つて居るが、これは氏が和歌俳句を閑人隱居の玩弄物と見るごとき淺薄の見地に安住して居るからのざれ言である。國語の生命輕視無視

はわが生命のそれとなる。唯物史觀と云ふごとき生命無視の歴史哲學に昏迷するものらを救ふべき唯一のみちが三井氏の唱へらるゝ「しきしまのみち」にあることを痛感せしめらるゝのである。「たゞよはぬ心」を國語の生命にめざませと祈らしめらるゝのである。（日本及日本人昭和三年三月一日號）

精神技術

よくは知らぬが、獨逸の新進社會學の泰斗としてまた思想的巨人として知られてゐるマックス・シエラーは西洋の自然技術と東洋の精神技術とを對照せしめて東西文化の渾融を思索してゐるといふことである。こゝに精神技術なる言葉が面白いと思ふ。東洋の學藝は謂ふ所の精神技術が主優勢要素である。繪畫にしてもその外形よりも、人格的と云ふか精神的といふかその方面を重んずるからして、氣韻生動といふやうのことが尊ばれる。また人としても知識才能といふよりも精神的鍛錬が重んぜらるゝ。その鍛錬を精神技術と名づけたものと思ふ。現代文明の趨勢は外形の整備は自然科學によつて促進急進せられたが内面の方面卽全一經驗としての精神活動の方面が亂雜に

取殘されてゐる狀態であらう。心理學などの方面にも、これもよくは知らぬが、抽象的間接的自然科學研究方法卽ち主として實驗心理學的方法よりも心理的活動を全體として把握しようとする努力が現はれて來たやうである。さうなると東洋の教學はその點に練磨を積んでゐることは云ふまでもないので、そこが西洋の活眼者に氣付かれて來たのであらう。

學課成績にのみによらず、人格試驗といふやうのこと卽ち少しぼんやりしてゐてもどこかとり處のある腹のしつかりしたやうな方面を詮衡するといふどこかの省の採用方法なども、西洋に、横溢するとまでは行かずとも一つの傾向となり來つた東洋文化研究と併行する現象と見てもよからう。小才子よりも底力のある人といふやうなことになれば宜ろしからうし、これは動亂時代の獨尊的人格としては必要の資格であらうから、青年も漸次に東洋の古典、佛教漢學方面のものも眼を通す習慣をつけるやうにしたらよからう、いつまでもマルキシズムなどを新らしいと思つて居ると時代おくれになる恐れがある。恐らく日本位現在マルクス流行の國はない筈で、どんなに考へても日本人は、日本人同志でやつて行くより外に方法はないといふ簡單のことが氣づか

るれば、萬國の勞働者結合せよが實行の土臺となるマルキシズムの夢想的なることはすぐ看破される筈である。「ロシアを守れ」と叫んでゐるので、すつかりマルキシストに愛想がつきる筈だ、民間の傳說的英雄として長兵衞と次郎長を有する日本人が、自分の國をすてロシアを守れなど云ふものに共鳴し得るわけがない。現代の青年はどうしても精神技術を鍛錬する必要がある。聞きかぢりを土臺として一言責を塞ぐまでに認めて見たのである。（共敬昭和三年一月號）

無心有想錄

何か書けといふ編輯者からの御命令に筆は取上げても差あたり、何の考もない。全く茫然としたのでもなく、しかし何かが心中にあるといふのでもなく、この處混沌未分の狀態であり、萬象に顯現する機微を含むの氣象とも云はうか。勿體ぶつて云へばこんなことにもなる。

何でもないと思はれる心も實は文化史的の開展の現在である。分析すれば複雜なものになるのである。

仕事を終へてぢつと落ついた時のその心持は何でもないやうであつても、そこに文化史的全開展が含まれて居る。

考へる時のみが考へるのでなく、考へて居らぬ時は考へる力となるものが養はれて居る時と見るべきである。

西洋流は何でも吐き出されるだけ吐き出すが東洋流は中へ中へとこもらして仕舞ふ流儀である。出來るだけ削減してしまふと云ふやり方である。それ故に見かけは無精である、貧弱である。それだけに中味は無限の複雜性を有するのである。澁味とか寂とか云ふのはこの一端にふれたものである。

せまくるしい長屋の屋根の上の朝顏の一鉢、くねり松の一鉢に無限の興趣を感ずることを忘れないのは何でもないことであるやうで日本文化史的意義が十分にそこに汲まれるのである。

一草一花一鳥一虫にも無限の宇宙的美を感得せしむるだけの力が日本人にはめぐまれて居る。繪畫でも舞踊でも音樂でも詩歌でも日本のものは西洋のやうに大がゝりの構成的でなくむしろ斷片的である。

考へて物を云ふ人の、言葉少なであるやうに日本のものが外形的に簡單であるのは考へぬいた上げ句の處をあらはすからである。

「世に生れながら知ること少けれども尅く念ひて聖と作る」と聖德太子の十七條憲法にある。この尅念が日本人の長い間に養はれて來た心の力である。共產主義にかぶれるものらはこの尅念を忘るゝので、非日本的思考法に迷はされて居るのである。

世の中が思ふやうによく爲し得ると思ふのは若氣の至りである。人間がみな神や佛のやうにならねば出來かねることを直ぐにも出來るやうに思ふのは尅念を缺くからである。人生の究竟相、つきつめたところをよく念はぬからである。

鬪爭を階級的に世界を一貫せしめ得るかに考へることが未熟至極の考である。鬪爭と云ふならば縱橫無盡に交錯して居るといふことを尅く念ふ丈の眞面目さを缺くのである。

それ故に和を貴しと爲すと聖德太子は仰せられたのである。これは「嫉妬の患その極りを知らず」と云ふ人生の洞觀痛感を內容として云はれたのであるから、たゞ仲よくせよといふやうなセンチメンタリズムではないのである。卽ち世界平和などをうか

〳〵と信仰せしめぬ爲の御言葉で、現代に於いては、國民的結束を促すものと頂かるゝのである。

階級鬪爭などを云ふものは人生が究極鬪爭的であることをよく念はぬ樂天主義である。センチメンタリズムである。無階級平和自由の天國といふやうなものを幻想して居るのである。脆弱至極の空想である。西洋流は外面には景氣がよくて中味は案外に脆いものであることがよく判るのである、東洋流、ことに日本流は外面は不景氣であるが、塚原卜傳の無手勝流で底は實に强いのである。不屈不撓的彈力を有するのは日本思想である。

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ
——折にふれて——

の明治天皇の御製（卅七年）はこのわれらの史的傳統的生命威力をあらはし給うたのである。

足利時代の能樂大成者世阿彌の花傳書といふ書物に能樂の極致を說いて「巖に花の咲かむが如し」とある。日本精神はこの「巖の花」である。極度に運動を抑制しての

能樂の舞は外面に沈靜であるだけに演者の精神には非常の緊張を要するのである。喜怒色に現はさゞる鍛錬的精神に相當するのである。

われらはいま日本のあらゆるものに對してむしろ無批判的に眼を注ぐ必要がある。それが西洋風の無批判的模倣を防止する應急の手段となり、また西洋風に對する消極的批判となるであらう。日本の傳統を尊重し親愛する心が訓練されゝば自ら西洋風に對する積極的批判力も養はれてゆくであらう。この意味に於いて小川鐵相の驛名右よみ斷行は理窟を離れて痛快のことであつた。

近くは明治初代の廢佛毀釋運動の史料編纂が村上、鷲尾、辻三博士によつて完成されたと云ふ。廢佛毀釋は突飛亂暴の仕事で、その後代に及ぼした惡影響が、今しみじみと顧みられてゐるのである。「尅念」を缺く仕事の末恐ろしいことが是でもよく判るのである。

苦のついた石をきたないと云つて洗ひ落して仕舞ふやうな雜風景な事をすれば後悔せねばならぬのである。石ですらさうである。まして何千年といふ日本文化傳統を無視して何でも新しいものがいゝなどゝ振舞つたらそれこそ後悔ほぞを嚙むとも及ばぬ

ことになるのである。

人間の弱點につけこむマルキシズムの惡酒に醉拂つても、性體もなくなつて居るものは僅かで、多くは生醉本性たがはずであらうことを信じたい。「ロシアを守れ」などいふことが日本人の心魂に徹するわけがない。そんなことが一寸でも耳に入れば猛然としてその不埒を叱責するだけの性根は失はぬことを確信しよう。香川縣では過般の總選擧で非國民的黨派の本性が暴露されて縣下の農民組合は殆ど全部その指導を離脱したのである。

ロシアはいま地獄のありさまであることはロシア事情通信社の正確に報道するところである。山梨縣の或村では、村長が赤化かぶれの青年に對して、ロシアの實狀を說き、これでもロシアを讃美するならば、卽刻ロシアに行くが宜しい、旅費は負擔すると云つたが殆ど應ずるものなく閉口して仕舞つたと云ふ話を聞いたのである。

人類生活は人間生活であつて神佛の生活でないと云ふこと、國際的對抗の生活、國民生活はそれ〴〵に文化の歷史を負擔するが故に世界が一社會になるといふことは永劫に實現されないと云ふこと、それでこそ人間として苦しみもある代りに面白味もあ

るると云ふことをいまお互によく〳〵念はねばならぬと信ずるのである。筆を取つて居るうちに混沌未分の胸から湧出て來た考のまゝをかきつけたのである。（同前昭和三年六月號）

穿苔錄

「深夜の雨の聲。苔を穿つのみならむや、巖石を穿却する力もあるべし」

正法眼藏「行持」中の語である。内心の緊張を偲ばしむる言葉である。藝術精進の心に通ふものがある。人に知られざる處にこもる藝術創作の苦痛を偲ぶことは更くる夜のしめやかに降る雨の音をきくにも譬へられよう。その苦痛は人を問題として居らぬからして、あらゆる人に訴ふる力を現はすのである。もとよりこれは專門的技術の修練を要する藝術に就いていふのである。學術的研究もそれが摯實のものであればその消息はこれと一つであらう。

○

深夜雨聲巖石穿却力を味ふとは日本藝術鑑賞の一面である。それが頽廢的となれば纖細萎靡となるのである。しかし弊は何事にもある。枝流の弊害から判斷して本流の

價値を沒却すべきではない。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

木搖れなき夜の一時や霜の聲

この二句に日本藝術の最高頂峯の一面は表現せられて居る。

○

報知新聞社主催浮世繪展覽會を見たが歌麿には頽廢的生命を認め得るのである。頽廢的であらうともそれが生命的であれば藝術的たり得るのは云ふまでもない。ロダンの藝術も一面觀からして頽廢的と云ひ得ると思ふ。ロダンが歌麿の藝術を攝取生命化したことの偶然でないことを知つたのである。歌麿には德川時代爛熟頽廢期の生命が活躍して居る。更に幕末動亂期を代表するものは北齋である。その描線と氣魄とは芳崖と脈絡せしめ得るのである。世の一部の定論の如く歌麿と北齋とは浮世繪の二大代表作家である。

○

秋月筆菅公像は珍重すべきものである。袴殿の「鏡の御影」の如き生命の瞬間的把

芭蕉乙字

捉は無いけれども菅公に偲ばしむる性格は適確に表現せられて居る。我國のそれらの肖像畫は傳神の點に於いて西歐の古名畫に優るとも劣るものではないことを確認し得たのである。しかし現日本畫壇に於いて「人」を描き得るものは大觀を措いて他にあるまいと思ふ。とにかく山水を描いて淸遠簡朴の情趣を充溢せしむる秋月が「人」を描いてケ程の效果を擧げようとは思はなかつたのである。（表慶館七月揭出）

○

「衆生利益のために貪名愛利すと云ふ、おほきなる邪說なり」（同前）これが道元の實踐的思想であつた。しかし謙遜して益名聲を博すると云ふ場合もある。貪愛すれば却つて得ようとするものを全く失ふ場合と表裏一致するのである。賢善精進の相を現ずるなからむと內心に覺悟するものを他から見てはその賢善精進の意氣に感激するであらう。確信とうぬぼれとは相隣して懸隔萬里する。

○

「一切諸法、悉皆解脫なり、諸法の空なるにあらず。諸法の諸法ならざるにあらず、悉皆解脫なる諸法なり」（同前）わかつたやうなわからぬところもあるが、無理を

せぬこと、現實隨順と云ふ消息に通はしめ得ると思ふ。人生は複雜であると云ふことは、實人生體驗の綜合的簡單化であるからして言ひ易くないのである。ゲーテが常識と儀禮とを貴んだことは「悉皆解脫なる諸法」と解脫せしめ得たからであると云ひ得る。ベートベンは岩に咽ぶせゝらぎの如くゲーテはまことに八重波の岸うつ大わだつみに比せらるべきであらう。

○

體驗綜合の故の、われらに取つて名けらるゝ日本思想は武備の統一的背景である。これを分析說明したものに素行の武敎要錄（手許に書冊なく書名確と記憶せず）がある。人生はあらゆる方面に武備を要する。「武とは天然の物則なり」とはこの要約言である。「闘を跨げば七人の敵あり」とはその通俗化言である。やむを得ざる對抗の生、人生は飽くまでも悲劇である。

○

一豆屋の老人は「國體は俺達の權利だ、株だ、容易に人手に渡すものかい」と云つたと云ふ。卑俗の言葉であるけれども日本臣民たるものゝ氣魄は示されて居る。實人

生に勞苦するものに人生の法則は自然に學得せらるゝのである。敎育學の概念的整理者はこの生ける傳統的敎育の綿々密々に行はれつゝあることを急着眼せよ。

○

動亂に緊張し和平に弛廢する內的鎖國攘夷は外的開國進取となつた。更に鎖國攘夷は尊王攘夷となつて實行思想的根據を得たのである。日本の危機に當つては常にこの展開がある。幕末から維新への史的開展の眩耀的光景がおほらかに偲ばるゝ。

湛ゆるみまた、せばまり流れゆく果しなき人生、わが自主自立國民史的生命の光明に集注放射せしめらるゝ世界人類史的開展、われを沒せしむるにあらはるゝ悠久の姿「日本」、「不可思議尊を歸命せよ」

○

綠野どころでなく地獄と云ふ悲痛の言葉に動かされる。人生の紛亂逼迫の苦惱を壓搾して示せば「地獄一定のすみか」に極まる。

無慚無愧のこの身にて
まことのこゝろはなけれども

彌陀の回向の御名なれば
功德は十方にみちたまふ

人のわざからではない、人生の運命ぞ、と觀ずる心を否定することは出來ぬ。またそれを人のわざからとしてはねかへしてゆく心を妨ぐることも出來ぬ。それが前者をみとめねば「宗敎は阿片なり」とならう。卽ちはねかへすことが前者の內に思入るゝことゝ離れぬやう、前者がはねかへす心と離れぬよう、微妙のつり合に乘つて開展する人生を思ふ。

どこにもよりつかれぬひとりとなつて人生を考へた釋尊と親鸞の心は人の心のある限りその何れかに出よう。われらにとつて釋尊の心は道元に代表せしめてよいと思ふのである。それから流れ出づる藝術的情意といふやうの事を考へて漠然たるものがあるのみだ。

○

常倫超出の藝術はその國民の常倫的水準の高さを示すものと云へよう、それ故に稀有であつて差支なく、また稀有なるべきものである。道元はさう云ふ風に考へたので

ある、藝術を排した道元の心は藝術修練の勞苦の道を示すものがあるのである。

○

穢濁苦痛と痛感せしめらるゝ人生そのまゝの隨順、卽ち國民生活の生成相續そのまゝを藝術的と思惟せしむる心は常倫超出の心にのみあるべきものである。たゞ國民をしてその樂を樂としその利を利とせしむるやうの方策が立てらるればよいのである。それは抽象的に云ふことのやうに簡易のものではない。そこにわれらの日常の勞苦の生が營まるゝのである。（以上青人草昭和三年八月號）

○

若宮卯之助氏は「日本主義の新解釋」に於いて「日本人と支那人との……差異は世界歷史の事實である。この大事實に對して新しい光を說明的に投げたものは日本人に岡倉覺三氏あり」と云ひ「岡倉說の要點は、亞細亞大陸文化の本體は、日本に會華して、日本にだけ發達を遂げる機會を得たと云ふのである」と紹介して居られる。岡倉天心は子規とひとしく今新しく顧みるべき明治の二大先覺者であると信ずるのである。造形美術の方面に於ける天心の日本的自覺は大觀觀山を統帥とする現畫壇の權威

美術院を生んだのである。美術院が天心神社を宗教的統一の中心として團結して居るのは注目すべきである。

○

雪舟は寫生的で元信は觀念的である。元信の構圖と描寫とが確實周密でありながら雪舟に對照せしむる時生彩を失ふのはこの故である。元信の畫は摸寫する氣にはなるが雪舟のはさう云ふ氣が起らぬ。元信は大敎育家と見るべく、こゝに狩野派は傳習的權威を確立したのである。美術院も系統から云へば狩野派であつて雅邦は明治時代の元信と見てよい。

○

陶工乾山の繪は、名聲の上から云へば光琳の比ではないが、淸新なる自然に肉迫して居るのはいさぎよい處があつて、光琳の圖案的華麗脆弱なるものよりは慥にすぐれて居る。

○

蓑田敎授の指摘によつて、世界的哲學者と云はるゝ西田博士は「自分自身の自分に

かへる」と云ふ極めて卑小局分の「自分」に立てこもらうとするのがわかつた、その「自分」は餘程立派なものとうぬぼれて居るからであらう。「自己をならふとは自己を忘るゝなり」「すみやかに本分人なり」元道などいふのとは大分規摸がちがふ。日本人的自覺ぬきの哲學的自覺はまことに始末がわるい。かうなると哲學者とはまさかと思ふ程のつまらぬことを勿體ぶつて言つて居るものだとして間違はない。

○

元清　世阿彌が「從來の猿樂の舞に田樂の能及び諸の舞を折衷して、舞ぶりを定め、幾多の新曲を作爲して謠曲を興し、太鼓大鼓小鼓横笛等を樂器と定め、その名稱は舊によりて猿樂と呼べるも、古來より專らとしたる可咲態は狂言として區別し」、（小中村博士歌舞音樂略史）とあるのを見ると檀林風の俳句から正風の俳句を興した芭蕉の仕事と一つであることが知らるゝのである。藝術の本態が嚴肅莊重のものであることが知らるゝのである。

○

葛城の慈雲尊者は「聖人の出づる國はその國は氣の毒である」と言はれて居ると云

ふ。面白い言葉である。慈雲尊者（眞言宗）のものは何かを一寸よみ、たしか「十善法語」であつたと思ふ。いまにその言葉のリズムがほのかに記憶されて居る。近代佛教徒の國體自覺者として注目すべき人とおもひ何か讀みたいものと思つて居る。「中央佛教」九月號小林正盛氏の論文から氣付かしめられたのである。

○

豐公が國事多忙の間に千利休を相手に茶道を嗜まれたのは對照强化的心理からであらう。藝術的簡易生活が茶道の本意であらう。その當時の有合せの茶柄杓が萬金に價するやうになつては正に茶道の墮落である。かう云ふ方面に改革者が現はれぬだらうか。

○

少し疲れたせいか、何もかけぬ。かういふ時には庭でもあれば草取でもしたらよいだらう。一張一弛は聖人のみちなりともある、まして凡愚われらの如きは無理はせぬことだ。たゞに「時ありて」であり、「おもひ立つこゝろのおこる」時をたのましめらるゝ。（同前昭和三年十月號）

偶感漫録

長井雲坪の畫幅展觀を一瞥した。南畫の體を得たものであらう。この人は一生不遇に終つたと聞いて居る。名利には頗る淡い人であつたさうだ。甘い繪を書かうといふやうな努力は少しも見ねぬ。風の吹き過ぐる如く水の流るゝ如くの筆致である。小幅の無雜作に描いた蘭、竹、山水などは殊に不盡の風趣が味はれる。かういふ繪は心境的であるからして眞似の出來さうで實は眞似の出來ぬものである。そこに畫家ではなく藝術の「人」と云ふ風格を偲ばせるものがある。畫材は狹いからして數幅見れば澤山であるが、かういふ繪はたしかに飽のこぬ繪であるに違ない。帝展の繪は畫工の繪であつて藝術家の畫ではないのが殆ど全部と云つてよろしい。本年のでは僅に福田平八郎の「菊」にやゝ風格の畫、藝術家の畫を見出したのみである。雲坪の繪は田舍の自然、帝展のものは人爲の都會と云ふ比較が出來る。

緊張のあとの、弛緩ではなく餘裕ともいふべきものが心身長養には必要であらう。極致的藝術は必ずわれらにこの餘裕を與へるものである。藝術の一般の鑑賞者へ與へ

る現世利益はこの餘裕にあると見てよしと思ふ。藝術の宗教的效果はそれが感覺的に與へる全情意的統一配合といふ點に存するのであらう。それを餘裕と云つておかう。

雲坪の南畫の如きはわれらの文化史的教養に密着してこの宗教的效果を與へ得る藝術であると信ずる。鐵齋のものになると少し鑑識眼を要しようが雲坪のは比較的に分りやすい。水鳥を乙といふ字のやうに書き下して居る無頓着さには不覺微笑を禁じ得なかつたのである。むろんそこには華山の如き鮮鋭さは認められぬけれどもわれらの心の一表現として十分の敬意を表し得ると思つた。

かう云ふ繪の鑑賞は山鹿素行の風流と云つた一つになると自分勝手に考へたのである。

○

「小僧と二人、丸五日間とあとはちよい〳〵大變な手間でしたが、三疊間が見違へるほどキレイになりました。タシナミといひタンセイといふ通俗の言葉に他から見て馬鹿らしいことにうれしさを感じます。これはしかし思想的老衰のセイでせうか」と友からのたよりにあつた。雲坪の畫の鑑賞と同じやうの心持でこの何でもない言葉が

なつかしく味はしめられたのである。

○

いろ〳〵に爲すこともその流れ行くさまを廣く見わたすとまことにわが計らひにあらずと知らしめられます。わが計らひもはかり知られぬ計らひとして綜攝せしめらるゝことを感じます。それ故にわが計らひはあくまでもやりつゝ、それをかう思ふところにすべて打ちやすらはしめ得ることゝ存じます。わが計らひとは卽ち煩惱熾盛と云はるゝところでありそれを不可思議力と綜攝せしむところ卽ち攝取不捨と心得てさしつかへないかといま一寸考へましたまゝを申上げました。（ある友への手紙の一節）

○

無源の水を尋究すれば、源窮まれども水窮らずといふ詩句を面白く味つた。國民文化史的無盡の源は溯源せしめられつゝしかもそこから流れ出づる文化史的開展力は無窮である。

○

「能に初心を忘れずして、時に應じ所によりて、愚なる眼にも、げにもとおもふ樣

に能をせむこと、これ壽福也」

「抑藝能とは諸人の心をやはらげて、上下の感をなさん事、壽福增長の基、遐齡延年の法なるべし、きはめきはめては、諸道悉に壽福延長ならん」

「この壽福增長の嗜と申せばとて、ひたすら世間の理にかゝりて、もし慾心に住せばこれ第一道の廢るべき因緣なり。道のための嗜には壽福增長あるべし。壽福のための嗜には、道正に廢るべし、道すたらば壽福おのづから減ずべし、正道延命にして、世上萬德の妙花を開く因緣なりと嗜むべし」

これは花傳書中の言葉である。藝術的は現世利益的のものであることがわかる。「たなすゑのみち」と「しきしまのみち」との平行關聯的實修の意義にも觸るゝものがあると思ふのである。「世間の理にかゝりて慾心に住」することが凡その人の常態であるからして「世間の理」を撥無するを藝術的と心得るやうのものが出て來るのである。

○

子規は「德川時代にて見識の高きは蕃山、白石、徂徠の三人を推す」といひ特に徂徠に就いて「彼があながちに佛敎を排斥せずして、人民は佛敎を信じてゐても差支な

ら、吾々は聖人の道を行へばそれで澤山である、などゝ說くところは實に心持のよい文で、とても韓退之などの夢にも考へつく處でない」と讃してゐる。また「宋儒の如き心を明にするとか、身を修めるとかいふ樣な工夫も全く之を否認し、唯々聖人の道を行へばそれで善いといふ處は餘程豁達な大見識で、丁度眞宗が阿彌陀樣を絕對と立てゝ、總てあなた任せの他力信心で進んで行くのと善く似て居る」と論じて居る。

子規は親鸞も素行も研究はしてゐなかつたらうが今日我らの認むるこの思想的關聯をすでに感じて居たものと見らるゝので誠に心持がよい、子規の「豁達な大見識」の知己を儒者としてはこの三人に認めたのであらう。

○

「泥棒が阿彌陀樣を念ずれば阿彌陀樣は攝取不捨の誓によつて往生させて下さる事疑なしといふこれ眞宗の論なり。此間に善惡を論せざる處宗敎上の大度量を見る」とも云つて居る。通俗的の云ひ方であつても宗敎的寬容の心持はこれにちがひない。唯現世利益を無視し得ざる現實生活に於いては泥棒は許し難い。被害者としては泥棒を憎む心を如何ともしがたい。直きを以て怨に報ゆるといはるゝのである。たゞ泥棒の

慚愧痛感心にのみ、許さるゝといふ當人にとつてのこの上もない難有き情意がみたさるゝのである。他から許すのでなく自ら許さるゝ心を惠まるゝのであり、それが宗敎の道德と契合する一點である。藥あればとて毒を好む無慚愧者には如何なる宗敎も濟度の手は下し難いのである。それ故に宗敎家が他の罪を許すごとき心を持つならばまちがひである。罪を犯した者が自ら許さるゝに至る心を說き得るのみである。自業自得を說く佛敎が心理的であるといはるゝのはここに基くのである。

○

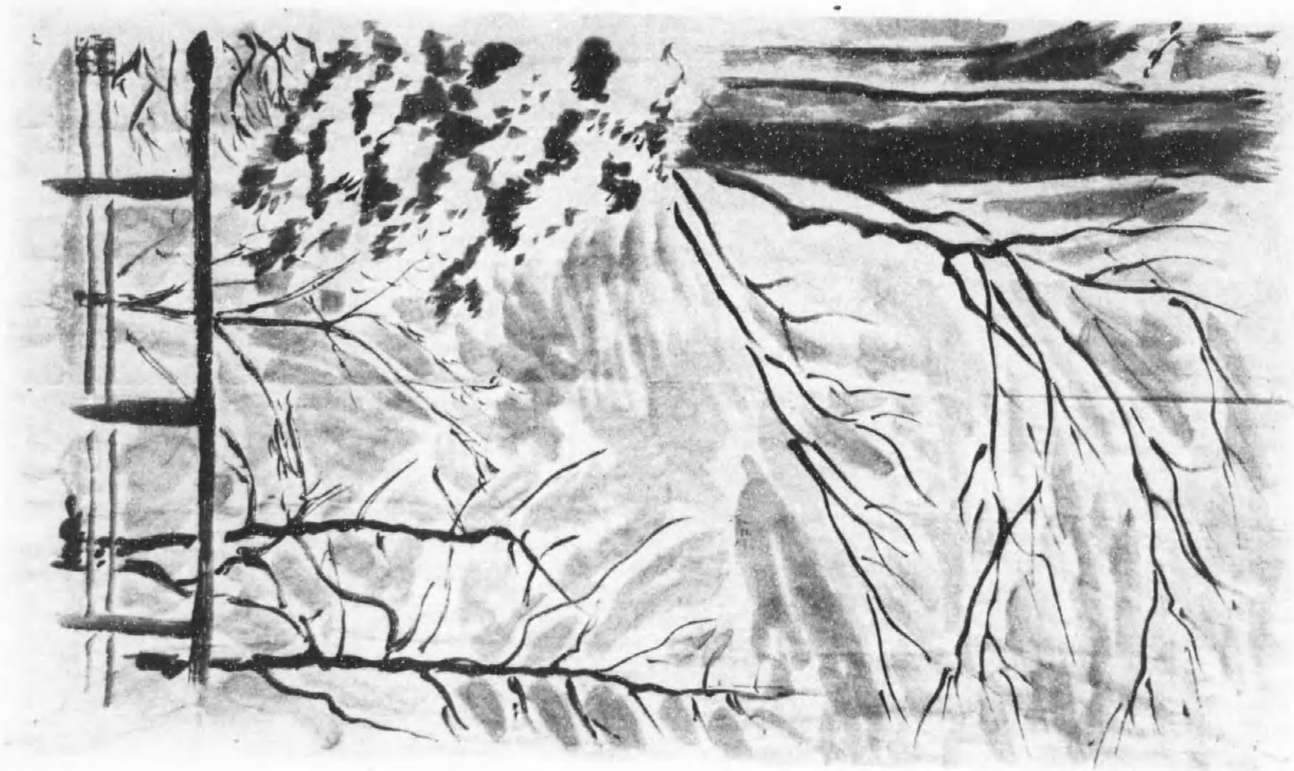
實證的にも、不可思議的にもある限度をみとめて釣合を失はぬやうに思想的態度を進めたいと考へて居る。歸納的、演繹的、經驗的、思索的が相互に補足關聯せしめられて初めて思想は綜合的となり得るであらう。俗事匆忙まとまらぬまゝをかきつけたのである。（原理日本昭和四年一月號）

附　篇

口繪說明

愛知縣齊年寺藏惠可斷臂圖は隨分の大幅で本書口繪の十數倍のものである。落欵は四明天童第一座雪舟行年七十七歳謹圖之とある。雪舟人物畫中の代表的逸品である。この繪を見て誰とて無感覺でゐられようか。まこと驚く外ないのである。本書第三章の資料である

著者自筆庭前雪景圖



直庵と華山

日本美術院で觀山所藏、華山の「米庵」外三點の肖像展觀で、本日參りました。原畫を見れば一層簡單です。「米庵」の草稿など、殊によろしく存じます。外に宮本二天の草盡などまづよろしく、他は雪村だめ、珍海なども、また支那の大家の作、これはインターナショナルのものですから、よくてつまらぬものでせう。華山のはすがしい日本語を偲ばせるものです、それで藝術も外國のものは、どんなによくても、讃歎は出來ぬことが本當かなど考へました。こゝはまだよく分りませぬ。直庵の龍虎圖が花鳥屏風と共にまた表慶館に出ました。どうもやはり虎ですが、こゝにも日本の現實精神は空想を打破しようとしてゐるのでせうか。その龍にせよ道具立の少いのが眼にたちます。應擧の有名でせうが龍もありましたが、まづ直庵の前にはナメクジですが、花鳥も結構なものでした。しばらくはこの前に時を過しました。……花鳥もよく見れば簡單な構圖ですが、一寸見ると非常に複雜です。線がすきまなく充實してゐるところ雪舟のみが比較にたへませうか。洋行せぬだけ直庵がやはり上かもしれませぬ。（人生と表現大正十二年五月號）

藝術のもとゝなるところ

「念は心におもひさだめて、ともかくもはたらかぬ」こゝろとのみおやのみ示しのやうをいま偲び居ります。その點はありがたく心得させていたゞけるやうでさてこれよりしてはたらく心を人の世と心得てはたらかさねばとむちうたしめら

れます。

蓄音器でワグネルのタンホイザーといふのをきゝましてやはりさう思つてきいたせいか、まことに複雜の諧音へ、たゝきつけるやうな高音で、それがみちびかれてといふよりも何と申しますか、メチヤクチヤのやうなところに力づよく統一されてゐるやうで面白く聞きました。

プラトンが藝術を否定しアリストテレスがそれを駁した、といふやうのことも本の廣告で見ましたが、さういふことはありそうのことで、しかしプラトンのは藝術的のものでせう。「ともかくもはたらかぬ」こゝろそのものは藝術とはいへぬやうで、しかしそれがまことの藝術のもとゝなるところでもあらうかと思つたりしていろ〳〵考へるのみです。とにかくみおやのは詮じつめての心で一人のこゝろといふところのきはまりといよいよ仰がるゝのみです。

今日は家族づれで帝展を見ました。小堀鞆音氏の定朝の神技といふのが手答へあるやうに見ました。その他はどうでもよいものばかり、小堀氏のはゴマカシ情趣のものでなく線描のたしかなのと構圖の簡單なのと彫刻の獅子が一疋躍り出さうとする勢も慥にうけとれるものでよいものと思ひました。

二見兄から御たよりでして……御返事に小堀氏の繪についての感想を申上げ御意見伺ひました。どう考へてもよいものとなつてしまひ、また小堀氏の意氣もたしかに最近の國民主義的思潮に乘托しての出來榮とも考へられます。小堀氏が從來變轉する畫界にはむしろ頑固に傳統を守り來つての今度の活躍ですからその邊

も考へていよ〳〵よいものになつてしまひました。ある意味に於いて東洋文化の活動を表徵したもの、たしかに日本精神にふれたものと見てゐるのですが、そちらに行きましたら是非一度御覽の上御鑑賞御もらし下さい。……（青人草大正十三年十二月號）

藝術は一切に君臨すとふこと

太子の義疏御稿本を拜觀せんと表慶館に子らと行きたり
われらの仰ぐ「和國の敎主」太子のみふでのあとをかしこみ拜しつ
千年餘を過ぎしいまにして水々しきみふでのあとを拜するかしこさ
しなやかにまたつよくしてたくまざるみふでのあとを拜しあかずも
寫眞にてかつて見し雪舟の惠可斷臂の圖かけられたるに眼見はりぬ
慈悲こもる大師の眼よ斷臂さゝぐる惠可の信順決意の眼のかゞやきよ
岩のさながらに細き描線と大師の衣の太き概括描線とのつりあひよ
見るになほ力まさりて見あかざる雪舟のこの繪は何といふべき
莊嚴といふ言葉も及ばずとしばらくこゝろうばゝれながめつくしぬ
藝術は一切に君臨すといふことこの繪さながらにあらはしてあり（青人草大正十五年一月號）

繪の話

二見兄が見にて久しぶりに繪畫に就いて話し合つた。現代では大觀がやはり自然を思はせる畫を描く。情趣的の、廣やかな、せまらぬところがある。觀山のは窮屈な、いぢけたもの、京都の關雪は氣

慨があるが、自然にピントを合せようとする喘ぎが見に、その氣慨は支那式で保つて居る。靱彦靈華となると平安朝式で、これは桃山時代に次いでの宗達光琳と見て明治時代の芳崖雅邦の全生命的からの崩れと見て比較が出來よう。日本的とは全情意的全生命的に名づく可きで、感覺的は地方的日本で、それが平安朝式となる。大雅堂は感覺的でないとの見せかけになつて居り實は感覺的趣味的のもの、華山となれば、賣立に並んで居るとはつきりと卓立する。その線には古土佐の生命が流れてゐると感じたが研究もしてゐたとの御話で肯かれた。芳崖は雅邦の先驅者、革新の苦悶、それをぬけた雅邦はやはり大觀の師である。雪舟と元信とは雅邦と玉章の比較にならう。惠可の眼と元信三聖の顏とでこの生命價値は一目瞭然である。（青人草大正十五年七月號）

レンブラントの繪

藏内氏のところへルーブルの寫眞帖大部のものが參り居り、その中にレンブラントのすばらしいイエスの圖がありました。その簡素な構圖、人物が四人、イエスを眞中に、エンマウス出現のキリストとのことですが、人間的のやつれた顏に遠くどこかをみつめてゐる眼がすばらしい。まことにそれは「神」を求むるものゝ目です。凡べて物を吸込んでしまうやうのその眼のかゞやきは實に深い。家の石の壁のかき方など雪舟のあの圖の岩にそつくりです。お目にかけたい畫です。藏内氏もこれにはすつかり感じられてその他すべての畫はこの一點に影を失つたといつて居られます。

ボティチエリーとかラフアエロとかのすべ〳〵したキレイな畫はまことに此の畫の前には權威を失ひます。僕らがヴインチ、レンブラントを選ばしめたことはあやまりないところです。

ことにレンブラントの草忽的？のところむしろヴインチの渾成的よりかわれわれにはぴたりと來るやうです。

何とも生成をゐぐり出す畫です。そのイエスの後光など見てゐるとその顏がかゞやいて來ますから妙です。鏡のみゐいのシンランの眼とひとつです。あれには後光のない丈にまたいゝかもしれません。とにかくすばらしい畫です。恐らく晩年の畫、困苦の中に出來たもので彼自身の精神がそこに具體化されて居りませう。或はどこかで御覽になつたかと存じますがあまりよかつたので一寸御しらせします。（青人草昭和二年一月號）

若冲の繪の寫眞

信實の繪の眼の前にあるごと示したまひしみうたのかず〳〵をすがしく誦しまつりぬ

うつし繪にみしにもすがしき信實の筆のあと墨色のしぬばるゝかな

柔軟のまた無雜作と示しますにいたれるいのちの表現を思ふ

たくらみの限りをつくして見るものゝ眼にはこちたき繪の世に多き

動けりとは見ゐぬ若冲の魚の繪にたぐへてしぬびぬ信實の筆を

一瞬のうごくいのちを捕へ得でかたちをつくせり若冲の繪は

直庵の鷹と若冲の雞の畫とにいのちのわかちはしられん

動くものあり〳〵と見ゆるとふみことばに現實淨化の藝術的表現力を思ふ（同前）

大觀の瀟湘八景と文雄の竹林秋粧

院展を二三日前見ました。大觀のは現代人的カンカクを漲らしてそれでゐて傳統的生命に、おちつかせて居るか、おちついて居るかどちらかですが、そこがゑらいと思ひました。素人にもよくわかりそれで專門家が頭を下げるでせうから何としても當代の第一人者でせうと思ひます。新進の內では田中文雄の竹林秋粧といふのが傑出してゐました。豐富な色彩を使つてゐて、畫面もむだがなく、それでゐて秋の寂しさをつかむことが出來てゐて內的なものがあり、大まかであり、これはこのまゝに進めば院展の一新異彩となりませう。さう見て居りましたが、畫の先生に聞きましたらやはり評判物ださうです。

大觀のは晩鐘は畫面にあらはし得ぬものをあらはし得た、鐘の響を。そこで內的で、骨が折れて居りませう。夜雨、秋月はさながらにその氣象を感受せしめられます。たゞ返照と歸帆とに金泥を使つたところはどうしても現代的カンカクがさうせねば許さなかつたであらうと思ひ、そこにまた當代の八景であることが意義づけられませうし、大觀の墨は卽ち色彩であることも暗示して居りませう。月に一寸ゴフンをぬりしてあるので、あれをあくまでも墨ばかりにしたらと思ひましたが、いろ〳〵考へて、これが新機軸のところと思ひ、洋畫のやりかたも攝取してあると思ひました。（二、九、二五）

信實の北野緣起繪卷

この間信實の北野天神緣起を見まして今更に驚かされました、大膽で緻密で一種のユーモアがたゞよひ解脫にみちびいて行くところは西洋の名畫がどんなものが來ててもびくともせぬことを感じました。「一寸見て拙く野暮くさくて超出的の味あるところ日本藝術の威力」と深草の友はお示しでしたが、俗にいはるゝ是が日本藝術の持味で、汲めども盡きせぬ味とはこのことゝ存じます。（三、二、一四、松本宛）

友へ

足利時代の繪の力あるを好ましく幼き筆を運ばせてうつし居り

ゑがき見むと思ひ立つまゝに筆とりてゑがけども思ふやうにならず

拙けれど成りし畫をこゝにかゝげつゝ思ひ煩ふことの久しき

從空出假とふ語おもしろく畫がくこゝろにあてはまる覺ゆ

そのこゝろに描きねたらむに畫のわざも自然法爾とふこゝろに通はむ

拙きまゝにみこゝろのなぐさめともならんかと思ふばかりに送りまつる畫よ

人の世のことも自然もあらはせば人のこゝろのなぐさめとならむ

ゑがくことにいとまを過しこの頃はうたうたふことも稀になりたり

ゑがき見むと思ふこゝろの押へあへず筆をそめつゝ日を過し居り

一つこと貫き得ずて身を終るさだめともへば淋しく覺ゆ

世の事は力ある人數ありていとなみゆくとひそかに信せり

いろ〳〵の思のうちをからうじて少しうたひ得しことのうれしさ（青人草昭和三年二月號）

描くにも

いたづらの筆のすさびを大阪のみ友によせむとわらみて見たり

いく枚かこれともふものわらみつゝそを床の邊にかけてながめつ

幼子はきたなき繪よと一言にするどき印象を云ひおほせたり

專門の技にあらねばきよからぬさまに描きてひとりよしともふ

描くにも信のこゝろは忘れじともひつゝわがくにしるしあらむか

世のさまの忍になることを願はねばおもひのまゝに筆そむるなり（三、六、二九）

帝展一覽

帝展を一覽したが、福田平八郎の「菊」に一番心を惹かれた。微弱ではあるが大觀の「葵」などに風格の通ずるものがある。島田墨仙の「李耳」も小幅ではあるが老子の顏貌の皮肉らしいところが邊りの大幅絢爛式に對抗してゐるやうで面白く見た、牛の描寫も手堅くすべて道具少であり淡彩式であるところも氣持がよかつた。特選で「赤目の瀧」は技巧本位として見れば精緻なものであるが、大和繪はやはり人物が活躍せねば綺麗などいふだけになる。「文覺」はその人らしくしつかりして居てよい。「大塔の宮」は御手本があるだけに損で精練な技巧が買はれるだけ。馬の足なども少ししつかりとありたかつた。概して特選は仕上げといふ點

からはなる程と思はせるだけのものはある。かう見てくると山田敬中の「夕暮の山の温泉」などは氣やすく平凡に見られるもの、妙に一所懸命になつたものより氣持がよい。翠雲の「春風駘蕩」もその方である。結極甚だ平凡な鑑賞になるがこれも年のせいであらう。

油畫の方は通つただけであつたが、特選の小幅、井垣嘉平の「稚き日」といふ、洋服を着た小供が長屋の板塀に日向ボッコをしてゐるらしいその顏がいかにもよく描けて居た。これは皆がにぢりよつて眺めて居た。油畫はかういふものがやはりよいと思ふ。レンブラントの「少女」の畫の顏を思はせる畫であつた。筆觸や何かで見せるものよりかういふ迫眞式のものがやはり油畫らしくてよい。

結局「菊」と「李耳」と「稚き日」の三幅だけが眼に殘るものとなつた。（青人草昭和三年十二月號）

藝術に於ける日本主義

完

編輯記

去年十一月曠古の大典御盛儀の擧行せさせらるゝを機會に、當青人草社に於いても意義ある著書を發行致したいといふので同人間にて詮衡の結果、木村卯之氏藝術論集が最もふさはしきものであると確信するに至つた。爾來實に半歲を超ゆる今日遷延の憾は免れぬのであるが、かくも本書を發行し得ること、何とも喜びに堪へぬのである。

東京原理日本社及びしきしまのみち會に於いては外來思想批判戰の矢表てに立つて目覺しき功績をあげられつゝある。わが青人草社に於いてもこれと表裏相應ずべき日本史的自覺を喚起すべく鞭を先づ日本藝術につけようとする。形は異つても同じこゝろを、時に遲速ありとも同じいのりを爲さしめらるゝと信ずることは何といふわれらの幸慶であらうか。

本書は藝術の專門的研究書ではない。日本國體の尊嚴と日本の史的生命と日本人の將來に對する確信とを道德政治教育學術のもとゝなるべき藝術に汲みいださうとする最も新しき試みといはねばならぬ。本書の先行篇、歌集「信のこゝろ」「綜合的親鸞研究」、「枝葉集」、「親鸞と歐洲諸思想」、「女性と信念」は既に讀者諸彦の耽讀せられてきたところと信ずる。

本書の題名は本社の計畫による提案にして著者の許されたところである。また本書の編纂發行は發議者松本平治兄の主なる盡力によるものであることを銘記する次第である。

昭和四年四月二十七日夜

井上　右近　敬白

木村卯之氏著書目錄

一、綜合的親鸞研究　定價金壹圓五拾錢　送料六錢
一、歌集「信のこゝろ」　同　金四拾錢
一、枝葉集　同　金八拾錢　送料四錢
一、第二枝葉集　親鸞と歐洲諸思想　同　金壹圓
一、女性と信念　同　金四拾錢　已上當社藏

同志機關

一、原理日本　東京市芝區三田四國町二七　蓑田胸喜氏方其社　菊版月刊雜誌一部　價金貳拾錢
一、しきしまのみち會々報　東京市小石川區大和町二三　松田福松氏方其會　四六版非賣品入會者へ頒布
一、青人草　當社　四六倍版型八頁物月刊一部　金拾參錢

昭和四年六月五日印刷納本　同年六月十日發行
著者　木村卯之
發行人　井上右近
印刷人　藤澤淨圓
印刷所　同朋舍
發行所　京都府紀伊郡深草町瓦町　青人草社
京都市下京區壬生川通五條下
京都府紀伊郡深草町瓦町
（振替口座大阪五八一二二番）
（藝術に於ける日本主義奥附）
【定價金壹圓】
送料不要
版權所有

終

青人草叢書